



TITLE:

碑文史料から見た古代南アラビア 諸王國とアラブ・ヘドウィンの關 係

AUTHOR(S):

部, 勇造

CITATION:

部, 勇造. 碑文史料から見た古代南アラビア諸王國とアラブ・ヘドウィンの關係. 東洋史研究 1998, 56(4): 839-883

ISSUE DATE:

1998-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155159>

RIGHT:

碑文史料から見た古代南アラビア諸王國とアラブ・ベドウィンの關係

薮 勇 造

はじめに

一 アラブ・ベドウィンに言及した南アラビア碑文

二 南アラビア諸王國とアラブ・ベドウィンの關係

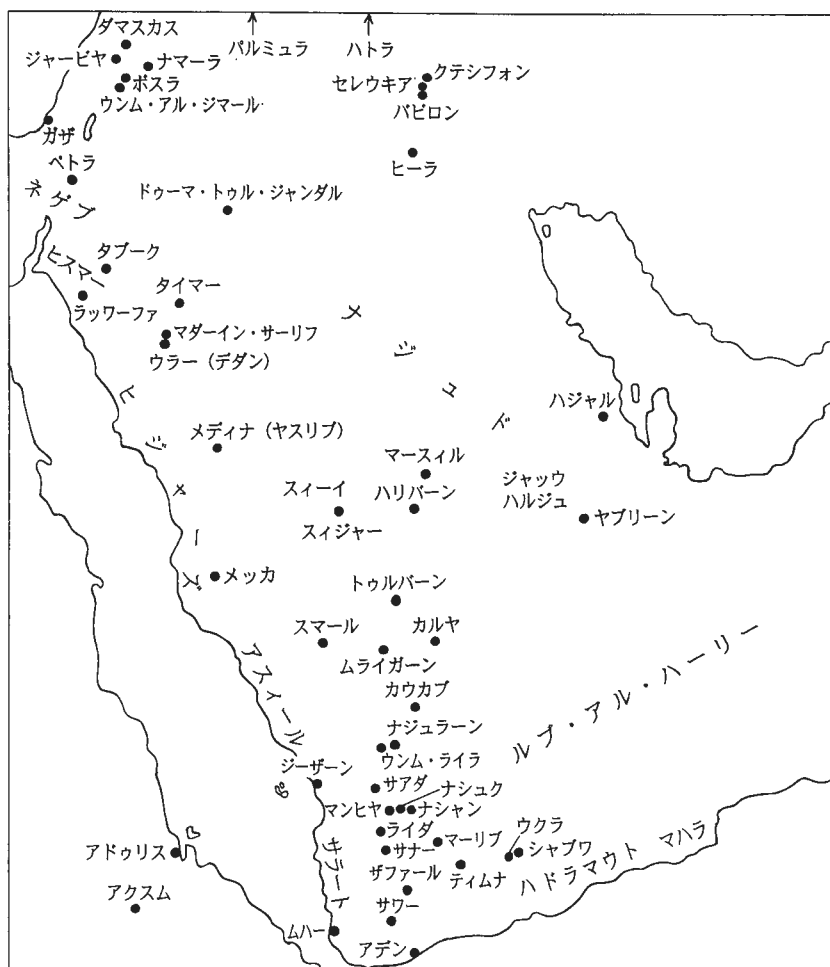
おわりに

はじめに

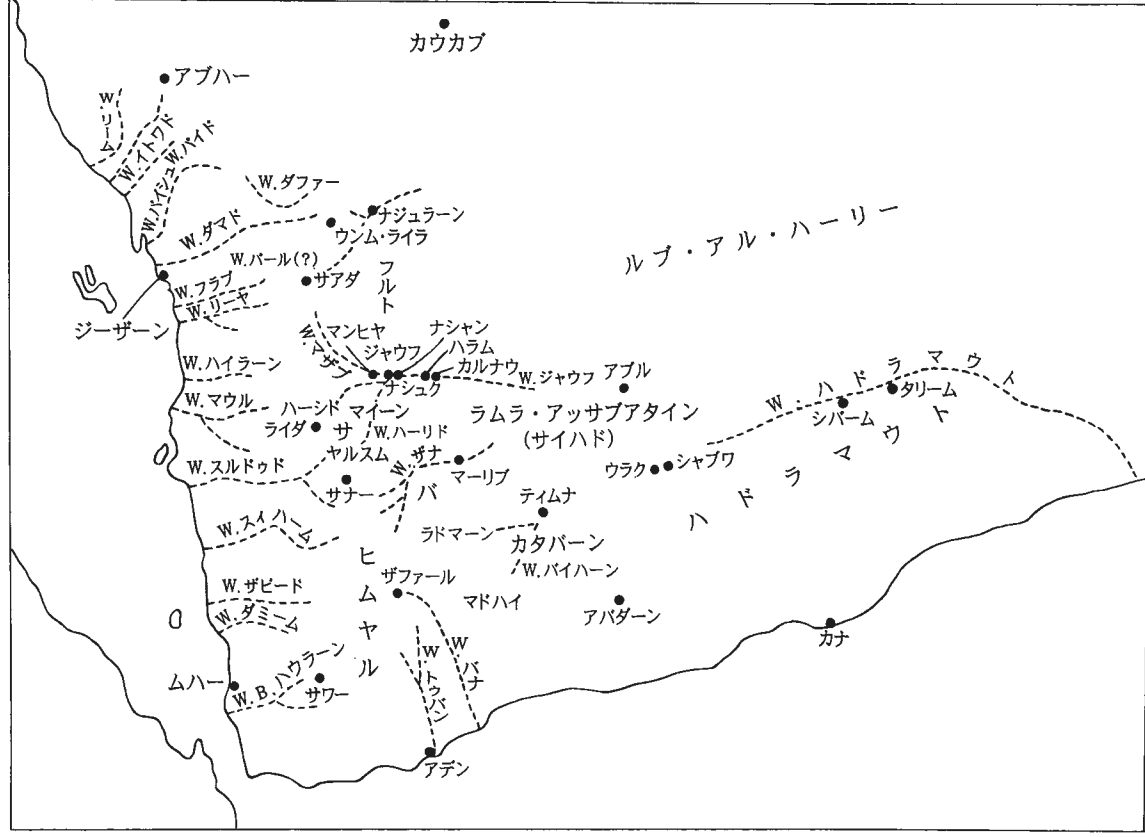
紀元前一千年紀の前半より、アラビア半島南西隅の現在のイエメンの地を中心に榮えた諸王國は、基本的には定住農民によって支えられた社會であつたが、周圍を砂漠に取り圍まれているという地理的條件と、その砂漠を越えて長距離の陸路交易を營んだ經濟的事情により、早くから周邊のラクダ遊牧民と淺からぬ關係にあつたと思われる。しかしその關係が史料的に確認できるのは遅く、この後見るように、ようやく一世紀前後になつてからのことであつた。そしてそれは、それに先立って南アラビアの社會・經濟を襲つた大變動の一環として、兩者の關係にも大きな變化が生じた結果と考えられる。

南アラビアの地勢はおおまかに言つて、西部と南部の海岸に平行して複數の山脈が走り、山脈の間には高原臺地や盆地

地図1 アラビア半島地



地圖2：南アフリカ



が形成されている。鉤形の山地の外側では、海岸との間に狭長な平地が續き、ワディの伏流水が得られるオアシス以外は、現在もラクダ遊牧が行われる砂漠である。山地の内側にはアラビア半島最大のルブ・アル・ハーリー砂漠が広がっているが、その南西隅に盲腸のような形で小さなサブアティン（別名サイハド）⁽¹⁾砂漠が突き出ているのに注意されたい（地圖2参照）。サバを始め、マイーン、カタバーン、ハド라마ウト等の初期の諸王國は、いずれもこの砂漠と山裾の接線上に點在する都市を中核として成立した。經濟的基盤となったのは、ワディをせき止め砂漠を灌漑して行われる農業と、砂漠縁邊の都市のオアシスを傳つて延びる隊商路を通じて行われる交易であつた。このようにして内陸砂漠の周邊に開花した古代の南アラビア文明を、ビーストン A. E. J. Beeston は砂漠の名に因んで「サイハド文明」と呼んだ。⁽²⁾

ところが、紀元前二世紀末頃から人々の活動の舞臺は、次第に内陸のオアシスから西部の高原地帯に移動したように見える。前一世紀の事情を傳える史料に突如出現するヒムヤルは、⁽³⁾おそらくカタバーンから分離した諸族が中核となつて、その前の世紀の末頃に南部高原に形成された大部族連合で、次第に國家としての體制を整え、その後の南アラビアの歴史をリードした。その一方で、内陸諸國家の中で最も北に位置し、アラビア半島の外にまで交易活動を展開したことで知られるマイーン人の國家は、ロバン Ch. Robin の説によれば前二世紀末に滅亡したといふ。⁽⁴⁾サバの紀元前最後の二世紀間の事情は史料不足のためよく分からないが、紀元後の時代になると、サナーを筆頭とする高原部の都市の重要性が高まり、サナーの北方に割據する諸部族が、既に國政を左右するまでになつていたことが看取できる。ヒムヤルの獨立によって完全な内陸國家となつたカタバーンは、徐々に衰退し二世紀後半にハド라마ウトに吸収された。

このような傾向がその後もさらに進行了た結果が現在のイエメンの人文地理的状況——政治・經濟・文化の中心は高原地帯にあり、サイハド文明の榮えた内陸部は砂漠化して人口稀薄——であることを想起すれば、右に記した紀元前一千年紀末の變動が、ただ單に古代南アラビア史の轉機であるだけでなく、この地域の全歴史時代を二分する劃期でもあることが理解されよう。

ではこれとほぼ時期を同じくして起こった、南アラビア諸王國とラクダ遊牧民との關係の變化は、この變動と如何なる關係を有したのか。いや、それ以前の問題として、そもそも南アラビア諸王國とラクダ遊牧民の關係にどのような變化が生じたというのか。

かつて私は、このような問題に取り組むための豫備作業の一つとして、古代南アラビア碑文の中に出てくる「アラブ」という語の用例の検討を試みた⁽⁵⁾。しかしその際には勉強不足に紙幅の制限も加わって、用例を時代順に列挙しただけの極めて不満足な結果に終わってしまった。今回は、その後の研究の進展と新史料に照らして舊稿の補訂を行つたうえで、舊稿以來の宿題であつた右記の諸問題について考察してみたい。

一 アラブ・ベドウィンに言及した南アラビア碑文

本章では、いくつかのキーワードをもとにアラブのラクダ遊牧民に言及した南アラビア碑文をピックアップし、年代順に並べて「表」とした⁽⁶⁾。最初にキーワードの説明を行うが、舊稿で唯一のキーワードとした「アラブ」の意味の検討から始めるのが適當であろう。

この語の初出例はアッシリアのシャルマナサル三世の碑文である。在位六年目（紀元前八五三年）にシリアのカルカルでアラムとイスラエルの連合軍を撃破したという記録の中に、連合軍側にラクダ一千頭を贈つた「アラブのギンディブ」なる者の名が出てくる⁽⁷⁾。これ以降、アッシリア、新バビロニア時代にはアラビ、アラブ、アリビ、アルバア等々の様々な形で、また次のアケメネス朝時代にはアラバヤという形で、楔形文字の記録の中でしばしば言及された⁽⁸⁾。舊約聖書では既に「創世記」の第一〇章と第二十五章で、アラビア半島の多くの種族や地域の名が挙げられているが、そこにはアラブという語は出て来ず、この言葉が現れるのは後代の諸本の中においてである⁽⁹⁾。もっとも「創世記」にしても、編纂はアッシリアの記録よりも後の時代なので、そこに記されているのが果たしていつ頃の状況なのか、正確には分からない。

表：アラブ・ベドウィンに言及した南アラビア碑文

No.	テキスト	王 名	年代 ¹⁰	事 項	出典
1	RES 3945	Krb'l/Wtr/MkS	前7C?	サバ軍がジャウフ, ナジュラーン地方に遠征→MH'MRM, アミール ('mrm) の両族からラクダを奪う。	15
2	RES 3943	欠損により不明	前6C?	サバ軍がジャウフ, ナジュラーン地方に遠征→マイーン, MH'MRM, アミールの諸族からラクダを奪う。	同上
3	Doe 2	ナ シ	1C?	カタバーンの巡禮団をアラブ人の盗賊 (ǧzwtm/bn/'rbn) が襲撃。	3
4	Ja 560	Nš'krb/Yh'mn/MS	100前後	傭兵 ('šhb) が配属地のマールィブから脱走したので, アラブ人の地 ('rd/'rbn) まで追跡して連れ戻す。	10
5	Ja 629	S'dšmsm/'sr'/MR Mrtdm/Yhmd/MR	2C前半	サバに敵対する諸族連合軍 (ハドラマウト, カタバーンを含む) にベドウィン ('rb) も加わる。 ティムナに進軍するハドラマウト人とアラブ人 ('rb)。	同上
6	Ja 601	Wtrm/Yh'mn/MR	同上	サバに敵対するハウラーン諸族 ('šbn/Hwln/Gddn) を征伐。	同上
7	Ja 561bis	Whb'l/Yhz/MS	2C中頃	サバ軍がサバのハーンド族の境界や, アラブ人, 即ちサバ王に敵対するベドウィンの地 ('rdt/'rbn/'rb/hṭ'w/b'mr'hmw/'mlk/Sb') や, サバ王に従う諸族の地で, ベドウィン ('rbn) と交戦。	同上
8	CIH 79	ナ シ	2C? ¹¹	サバ人がジャウフ上流のマンヒヤ (Mnhmt: 現 Hizmat Abī Tawr) でアラブ人 ('rbn) と交戦。	6
9	CIH 343	ナ シ	2C?	サバのバタア族の配下の一族が, ヒムヤルとアラブ人の地 ('rd/Hmyrm/w'rbn) で戦う。	同上
10	GI 1177	ナ シ	2/3C?	サバのスハイム族が配下のヤルスム族領の東で, スフル (Sfln) 族とそれに従うベドウィン ('rbn) と交戦。	21

11	CIH 308	'lhn/Nhfn/MS Š'rm/'wtr/MS	2C 末	サバ、ハドラマウト、ハバシャの3勢力が對ヒムヤル同盟を結成。一方、サバ軍に攻められたサンハーン (Šnḥn) 族の 'm'ns とハウラーン族 (š'bn/Hwln) は、援軍要請のために Šbt/bn/'lyn をヒムヤルに派遣。	6
12	Nami Na- NAG 13-14	'lhn/MS	同上	ヒムヤル軍が、サバ王の正規軍とベドウィン部隊 (hmys/w'rb/mlk/Sb'), ハドラマウト王の正規軍とベドウィン部隊 (hmys/w'rb/mlk/Hḏrmwt), ハバシャ王の軍勢と交戦。	20
13	Robin-Umm Laylā 1	ナ シ	3C 初?	ハウラーン族 (š'bn/Hwln/Gddn) がサバに服属して、侵入するハバシャに抵抗。	16
14	Ir 12	Š'rm/'wtr/MR	3C 初	ハーシド族の境界を脅かすハバシャ軍に、サラートの人々とハウラーン族 (Swḥrn/wHwln) も加わる。 サバ軍は、ハーシド族と彼らの許にいるベドウィン移民の子孫 ('bnw/'rbn) 12 を防衛。ハバシャ軍と彼らとともに侵入してくるベドウィン ('rbn) を、アラブ人 ('rbn) の部隊を率いてハーシド族領の西方で迎撃。さらに Hrbm/bn/'lyn 等に率いられたハウラーン人 ('hwrn) を、サラートのワディ・ハイラーン (Hyrrn/dŠhrtn) の近くで打ち破った。	8
15	Ja 635	同 上	同上	サバ軍はまず、サラートにおいてアシュアル (š'rn) と BḤLM の兩族を攻撃。 次いで、カルヤ・ザート・カーヒル (Qryt/dt/Khlm: 現 al-Fau) において、キンダとカフターンの王、サウル族のラビーア (Rb't/d'l/Twrm/mlk/Kdt/wQḥtn) を討った。さらに彼らに味方するユハービル族 (šrt/Yḥbr) を討つためにベドウィン ('rbn) を含む部隊を率いて轉戦し、アスド族の地 ('rd/'l'sd) の近くのスマールのオアシス (mwnhn/dTml) で彼らと交戦。	10
16	MAFRAY- al-Mi'sāl 4 13	'l'z/Ylt/MḤ	同上	シャブワに駐屯するベドウィン部隊 ('rb)	未刊

17	Ja 957	Yd*1/Byn/MH	3C前半	ウクラでハドラマウト王の主催する式典に参列したアスド族の一員 ('sd-yhn)。	7
18	Ja 939	(同 上) 14	同上	同上 ('sdyn)。	同上
19	Ja 962	(同 上)	同上	同上 ('sdyn)。	同上
20	Ja 2110	'lšrh/Yḥḍb/MR Y'zl/Byn/MR	同上	サバ王が、北の諸王('mlk/s'mt), 即ちアスドの王ハーリス('lḥrt/bn/K'b'm/mlk'sd) と、キンダとマズヒジュとベドウィンの王マーリク (Mlkm/bn/Bd/mlk/Kdt/wMḍḥgm/wḍbn/'rbn) に遣使。	7
21	CIH 314+954	同 上	同上	ハバシャがサワー市とサラート (hgrn/Šwm/wShrtm) を占領。	6
22	Ja 576	同 上	同上	キンダ王マーリク (Mlkm/mlk/Kdt) とキンダ族 (š'bn/Kdt) は、人質として HŠŠTN 王イムルッルカイス (Mr'lqs/bn/'wfm/mlk/Hšštn) と、キンダの王ヤシェイク達の息子を、また賠償として多くのラクダを、サバ王に引き渡した。 サバ軍はまた、ハバシャ、サラートの人々 (dShrtm), ヒムヤルと交戦。	10
23	Ja 577	同 上	同上	サバ軍は、ハバシャ、サラートの人々 (dShrtm) と戦う一方で、ハウラーン族 (š'bn/Hwln/Gddm) を攻撃。	同上
24	Ja 2109	同 上	同上	バタア族の一員がサアダ市とハウラーン地方 (hgrn/Š'dt/w'rd/Hwln/Gddm) をアーキブ ('qb) として統治。	7
25	CIH 350	(同 上)	同上	サバのハムダーン族の臣下が、アラブ人部隊 ('rbn) を率いて、アシール (?) のバーリク (Brqm) 族を攻撃。	6
26	Ir 69	同 上	同上	サバ軍がサラートにおいて、ハバシャ、サラートの人々 (dShrtm) を襲撃。	5, 9
27	Ja 575	同 上	同上	サバ軍がサラートにおいて、ハバシャ、アック ('km) 族と彼らに従うサ	10

				ラートの人々 (dShrtm), サラートの諸族 ('š'b/dShrtm) を攻撃。	
28	Ja 585	同 上	同上	ハバシャがサワー市とサラート (hgrn/Šwm/wShrtm) を占領。	同上
29	Ja 574	同 上	同上	サバ軍が, ワディ・スィハーーム (srn/dShm) とワディ・スルドゥド (srn/dŠrdd) の流域で, アクスム, GMDN, アック ('km), サラートの人々 (dShrtm) を襲撃。	同上
30	Ir 19	同 上	同上	サバ軍がサラートにおいて, ハバシャ, アック ('km) 族, サラートの人々 (dShrtm) と交戦。	4, 8
31	BR-M. Bay- ḥān 1	同 上	同上	サバ軍が, ヒムヤルとサラートの人々 ('shrn) と交戦。	17
32	Ja 716	(同 上)	同上	ハムダーン族がスフル族 (š'bn/Sfln) と争う。	10
33	Ja 739	(同 上)	同上	サバ人が, マドハイとラドマーンとカタバーンの地で, ベドウィン ('rbn) とともに戦う。	同上
34	Ja 758	(同 上)	同上	同 上	同上
35	ZI 75	ʾlšrh/Yḥḏb/MR	3C中頃	サバ王が, ガッサーン族, アスド族, ニザール族, マズヒジュ族の王達 ('mlk/'š'bn/Ġsn/wl'sd/wNzrm/wMḏḥgm) に遣使。	1
36	MAFRAY- al-Mi'sāl 3 13	Krb'l/yf/MR	同上	ヒムヤルに敵對するハドラマウト軍の部隊を, アラブの首長サウブスィー (Ṭwbsy/swd/'rbn) とマアッド族のハーリス (Hrṭm/bnw/M'dm) が指揮。	未刊
37	Ja 616	Nš'krb/Y'mn/ Yhrḥb/MR	3C後半	サバ軍がハウラーンの諸族 ('š'b/w'šr/Hwln/Gddm) を征伐。この戦いに際し, サバ軍はまず DW'T の諸族 ('š'b/Dw't) を偵察, 次いで DW'T の諸族 ('šr/Dw't), 即ち 'B'S 族, 'YD'N 族, KHMM 族, ḤḌLNT 族, ĠMDM 族, KHLM 族, 'HLNY 族, GDLT 族, SBSM 族, ḤRMM 族, ḤGR 族, LMD 族, 'WMM 族, RDḤTN/BN/ḤRT 族	10

				(‘šrt/’b’s/w...) を, パール, フラブ, TDHN 等のワディ (‘wdyt/ dB’rn/wHlb/wTdhn) の下流域で襲撃。	
38	Ir 20	同 上	同上	サバ軍が, ハバジャとそれに従う RSM, 及びサラートの人々 (‘shrñ) と交戦。	8
39	CIH 353	Šmr/Yhr’š/MR	3C 末	バタア=ハムダーン族の臣下が, ライダの人々, スフルの諸族 (‘šr/Sfn), マーリブのベドウィン部隊 (‘rb/Mrb), 及び D’BN と ’RŠM と戦って降伏させた。	6
40	Ir 17	同 上	同上	ハムダーン族が, 配下のハーシド族領を侵したスフルの諸族 (‘šr/Sfn), ヤーム族とカルヤの人々 (Y’mn/wdQryt), 及び D’BN, ’RŠM と交戦。またワディ・TDHN でアック (‘km) を, ワディ・イトワドとワディ・リーム (‘twd/wRymm) で DW’T を攻撃。	8
41	Ja 649	同 上	同上	ヒムヤル軍がサラートのワディ・リーヤ (Shrtñ/Lyt) 等に遠征。またワディ・ダマド (srñ/dDmdñ) において HRT 族 (š’bn/Hrt) と交戦。さらにアックとサラートの諸族 (š’b/‘km/wdShrtm, š’b/w’šr/‘km/wdShrtm) と交戦。	10
42	CIH 407	同 上	同上	ヒムヤル軍がサラート, DW’T, スハール, HRT の諸族 (š’b/dShrtm/wDw’t/wShrm/wHrt) と, サラートにおいて交戦。またワディ・ダマド (srñ/dDmdñ) において KWTNHN と交戦。	6
43	BR- M. Bayḥān 5	同 上	同上	ハドラマウトへのキンダの支援部隊 (zbd/Kdt) をヒムヤル軍が待ち伏せ攻撃。	17
44	Sh 32	同 上	同上	ヒムヤル王のハドラマウト遠征に, サバ族 (š’bn/Sb’) やベドウィン部隊 (‘rñ) も従軍。ラクダ騎兵隊を構成する諸族の中に, アラブ人とキンダ	2, 22

				(‘r _{bn} /wKdt) の名も挙げられている。	
45	Ja 658	Šmr/Yhr‘š/MY	4C 初	ヒムヤル王がハウラーン地方 (‘rd/Hwln/Gddn) に遠征。サアダ市に守備隊を置いて、ハウラーンの諸族 (‘šr/Hwln/’gddn) と和約を結ばせた。その後、ワディ・ダファー (srn/Df) においてサンハーンの諸族 (‘šr/Šnhn) と、またワディ・イトワド (srn/‘twd) において NŠD‘L の諸族 (‘šr/Nšd‘l) と交戦。	10
46	Sh 31	同 上	同上	ヒムヤル王がアスド王マーリク (Mlkm/bn/K‘bm/mlkl’sd) に遣使。またベルシアの二王都クテシフォン並びにセレウキア、及びタヌーフの地 (Q!wšf/wKwk/mmlkty/Frs/w’rd/Tnh) に遣使。ハウラーンの地 (‘rd/Hwln) のサアダ市にアーキブ (‘qb) を任命。	13
47	Ja 660	同 上	同上	碑文起草者：ハドラマウト、キンダ (Kdt), マズヒジュ (Mdḥgm), BHLm, ḤD‘N, RḌWM, ‘ZLM, ‘MRM の (...?)。マーリブから脱走したジュルフム族 (?) のハーリスとサイド (Hrtn/bn/K‘bm/wS‘dm/bn/‘mrm/Grynhn), 及び彼らに従う NH‘N, ジュルフム (Grm) 両族の兵士達を、王命によりフルト (Frtn) まで追跡して捕え、マーリブに連れ戻した。	10
48	Ja 665	Ysrn/Yhn‘m/MY Dr‘mr/’ymn/MY	4C 前半	碑文起草者：ヒムヤル領内の全ベドウィン部隊の長官 (kbr/‘rb/mlk/Sb/’wKdt/wMdḥgm/wHrmm/wBhlw/wZyd‘l/wkl/‘rd/’Sb/’wḤmyrm/wḤḍrmwt/wYmnt)。 王命により、サバ王とキンダのベドウィン部隊 (‘rb/mlk/Sb/’wKdt), それにナシュクとナシヤンの市民部隊を率いてハドラマウトに遠征。	同上
49	Ir 32	Dmr‘ly/Yhbr/MY	同上	碑文起草者：同上 (タイトルも同じ)。 ハドラマウト軍の攻撃に備え、アラブ人傭兵隊 (tmhrthw/‘r _{bn}) を指揮してナシュクを守備。	8

				その後、サバ族軍、サバ王とキンダとナジュラーンとスフルのベドウィン部隊 ('rb/mlk/Sb'/wKdt/wNgrn/wSfln) を率いてハドラマウトに遠征。	
50	CIH 397	(48又は49と同じ)	同上	サバ族軍とアラブ人部隊 ('rbn) とともにハドラマウトに遠征(上記48又は49の遠征)。	6
51	'Abadān 1	T'rn/Yn'm(MY) 15 T'rn/'yf'(MY) Dmr'ly/'yf'(MY)	360	ヒムヤル軍がサラート、ハドラマウト、マハラ諸地方、及びヤブリーン(Ybrn)を轉戦。 次いでムラード、マシュリク、ダイファ(の諸族の兵)とハドラマウトのベドウィン(Mrdm/wMšrqn/wDyftn/w'rb/Hđrmt)を率いるイヤードの族長、サルールの息子サアラバ(T'ibt/bn/Šllm/syd/'ydm)を捕捉。 またアスドの地('rd/'sdn)でスダイイ、ラサン(Şdyn/wRsn)の兩族と交戦。 さらにジャッウとハルジュ(Gwm/wHrgn)に遠征して、マアッドの諸族('šrm/bn/M'dm)と交戦。 サラートに遠征、ワディ・フラブ(srn/Hlb)においてĠTYNを討つ。 サラートに遠征、ŠWRYNとワディ・スルドッドにおいてアック('km)と交戦。 マシュリク、ダイファ、キンダ、マズヒジュ、ムラード(Mšrqn/wDyftn/wKdt/wMđhgm/wMrdm)の諸族の兵を率いて、マアッド(M'dm)、中でもアブドルカイス族('šrtm/'bdqysn)―シャン族('šrtm/Šnm)、バヌー・スクラ(bny/Nkrt)、バヌー・サビラ(bny/Šbrt)―と、ニザールの地とガッサーンの地の間(bynn/'rd/Nzrm/w'rd/Ġsn)スィーイのスィジャーの井戸の邊で(bSyn/'ly/mw/b'rn/Sgh)交戦。	18
52	Ja 788+671	T'rn/Yhn'm/MY Mlkkrb/Y'mn/MY	4C後半	マーリブ・ダムの堰堤工事に、正規軍とともにアラブ人部隊('rbn)も動員されている。	10

53	Ry 509	'bkrb/'s'd/MA Ḥśn/Yh'mn/MA	5C初	ワディ・マースィルに残されている磨崖刻文：マアッドの地 ('rd/M'dm) へのヒムヤル王の遠征を記念。 キンダ (Kdt), SWD, WLH 等からなるベドウィン部隊 ("rb) も従軍。	19
54	Fa 74	Mrtd'ln/Ynf/MA	504	マーリブのサバ・カフラーン族 ('srthmw/Sb'/Khln)。	14
55	Ry 510	M'dkrb/Y'fr/MA	521	ワディ・マースィルに残されている磨崖刻文：この地へのヒムヤル王の遠征を記念。 ムンジル (Mdrm) に支援されたアラブ人 ('rbn) の反亂の鎮定に、キンダとマズヒジュからなるベドウィン部隊 ("rbhmw/Kdt/wMdḥgm) と、バヌー・サアラバ (bny/T'lt), ムダル (Mdr), シバーウ (Sb') の諸族の兵も従軍。	19
56	Ja 1028	Ywsf/'s'r/mlk/kl/ 'š'bn	523	ムハー (Mḥwn) 附近でアシュアルを攻撃。 ナジュラーンへの遠征軍：町の住人とアラブ人からなるハムダーン族(š'b/dHmdn/hgrn/w'rbn), 及びキンダ, ムラード, マズヒジュのベドウィン部隊 ("rb/Kdt/wMrdm/wMdḥgm) で構成されていた。	12
57	Ry 507	mlkn/Ysf/'s'r	同上	ナジュラーン遠征軍：ベドウィン部隊 ("rbn), 及びハムダーンに属す諸族とベドウィン ('š'b/dHmdn/w'rbn) で構成されていた。	19
58	Ry 508	同 上	同上	ムハー附近でアシュアルを攻撃。 ナジュラーン遠征軍：町の住人とベドウィンからなるハムダーン諸族(š'b/dHmdn/whgrhmw/w'rbhmw), 及びキンダ, ムラード, マズヒジュのベドウィン部隊 ("rb/Kdt/wMrdm/wMdḥgm) で構成されていた。	同上
59	CIH 541	'brh/MA	547/8	キンダ (Kdt) の副王 (ḥlft) に任ぜられていたヤズィード (Yzd/bn/Kbšt) が反亂を起こし, ハド라마ウトを侵す。その降伏後, 同調しないアラブ人 ('rbn) に降伏勧告→受諾。 各地の支配者からの使節到着：アクスム王の使節 (mḥškt/ngšyn), ビザ	6

				ソツ皇帝の使節 (mḥškt/mlk/Rmn), ペルシア皇帝の使節 (tnblt/mlk/Frs), ムンジルの使節 (rsl/Mḍrn), ジャバラの息子ハーリスの使節 (rsl/Ḥrtñ/bn/Gblt), ジャバラの息子アブカリブの使節 (rsl/'bkrb/bn/Gblt)。	
60	Ry 506	同 上	552/3	ムライガーンに残されている磨崖刻文：ヒムヤル王の遠征記念。 バヌー・アーミル (bny'mrm) が反亂を起こしたので、マアッド (M'dm) に對して4度目の遠征を行った。 キンダ (Kdt), ムラード (Mrdm), サアド (S'dm) の諸族の兵を率いて鎮定に向かい、トゥルバーンの水場 (mnhl/Trbn) でバヌー・アーミルを、さらに進んでハリバーン (Ḥlbn) でマアッドを討った。 ムンジルの息子アムル ('mrm/bn/Mḍrn) が事後處理の交渉→人質と賠償を引き渡す。	19

王號の省略記號

MkS: Mkrb/Sb', MS: Mlk/Sb', MR: MS/wḍRydn, MY: MR/wḤḍrmwt/wYmnt, MA: MY/w'rbbmw/twdm/wthmt, MḤ: Mlk/Ḥḍrmwt

出典の省略番號

1. Bāfaqih, M. A. and Ch. Robin, "Min nuqūš Maḥram Bilqis", *Raydān*, 1, 1978, 11-56 (Arabic section).
2. Beeston, A. F. L., *Warfare in Ancient South Arabia (2nd.-3rd. centuries A.D.)* (= *Qahtan: Studies in old South Arabian Epigraphy*, Fasc. 3), London, 1976.
3. Id., "Miscellaneous Epigraphic Notes", *Raydān*, 4, 1981, 9-28.
4. Id., "Lineation of the Sabaic Text Ir 19", *Raydān*, 6, 1994, 37-39.
5. Bron, F., "Sur une nouvelle inscription historique sabéenne", *Studi epigrafici e linguistici*, 10, 1993, 79-83.
6. *Corpus Inscriptionum Semiticarum*. Pars Quarta: *Inscriptiones himyariticas et sabaicas continens*, 3 vols., Paris, 1889-1930.
7. Doe, B. and A. Jamme, "New Sabaean Inscriptions from South Arabia", *JRAS*, 1968, 2-28.
8. al-Iryānī, M. A., *Fī ta'riḥ al-Yaman*, al-Qāhira, 1973.
9. Id., "Al-Iryānī 69", *Raydān*, 5, 1988, 9-16 (Arabic section).
10. Jamme, A., *Sabaean Inscriptions from Maḥram Bilqis (Mārib)*, Baltimore, 1962.

11. Id., *The Al-'Uqlah Texts*, Washington, D.C., 1963.
12. Id., *Sabaean and Hasaeen Inscriptions from Saudi Arabia*, Roma, 1966.
13. Müller, W. W., "Eine sabäische Gesandtschaft in Ktesiphon und Selenkeia", R. Degen et al., *Neue Ephemeris für Semitische Epigraphik*, Vol. 2, Wiesbaden, 1974, 155-165.
14. Id., "Neuinterpretation altsudarabischer Inschriften: RES 4698, CIH 45+44, Fa 74", *Annali* (= *AION*), 36 (N. S. 26), 1976, 55-67.
15. *Répertoire d'épigraphie sémitique*, Vol. 5-8, Paris, 1928-1968.
16. Robin, Ch., *Les hautes-terres du Nord-Yémen avant l'Islam*, 2 vols., Leiden, 1982.
17. Robin, Ch. and M. Bataïq, "Inscriptions inédites du Maïram Bilqis (Marib) au Musée de Bayhan", *Raydān*, 3, 1980, 83-112.
18. Robin, Ch. and I. Gajda, "L'inscription du Wadi 'Abadān", *Raydān*, 6, 1994, 113-137 and 193-204 (pl. 49-60).
19. Ryckmans, G., "Inscriptions sud-arabes X", *Le Muséon*, 66, 1953, 267-317.
20. Ryckmans, J., "L'inscription sud-arabe Nami NAG 13-14", *Eretz Israel*, 9, 1969, 102-108.
21. Schaffer, B., *Sabäische Inschriften aus verschiedenen Fundorten* (= *Sammlung Eduard Glaser VII*), Wien, 1972.
22. Sharaf ad-Dīn, A. H., *Ta'riḥ al-Yaman at-taqdīḥ*, 4 vols., [al-Qāhira], 1967.

ではこの語の意味するところは何かという問題になると、語源についての説は定まらないが、⁽¹⁶⁾民族・種族を問わずシリ
ア砂漠のラクダ遊牧民一般を指しているという点では、大方の意見は一致している。⁽¹⁷⁾つまりエスニックグループとしての
「アラブ人」ではなく、むしろ「ヘドウィン」⁽¹⁸⁾の同義語と解する譯である。前二世紀後半にバビロンの住民を悩ましたア
ルバアや、後二世紀後半のハトラ碑文に現れるアラバイユに至っても、「アラブ人」と翻譯されながら、なお研究者の間
にはこれを特定のエスニックグループと解することへの躊躇が見られる。⁽¹⁹⁾

古代南アラビア碑文の中でこの語は、⁽²⁰⁾「*ḥb(h)*」と「*ḥb(h)*」という二つの形をとって現れる。語尾の「*h*」は、アラビア語
の定冠詞「*al-*」に相當する限定辭である。他の語や節が後ろから係る場合には、「*h*」の附かぬ接續形をとる。表からも明ら
かなように、紀元前には全く用例がなく、一世紀になって初めて碑文の中に登場する。⁽²⁰⁾北方起源の外來語と考えてまず間違
いない。碑文を残した人々の目から見て、彼らとは異質なラクダ遊牧民（以後ヘドウィンと呼ぶ）を指しているのも間違

いないが、南アラビアの場合には、これが同時にエスニックグループとしてのアラブ人（それも北アラブ⁽²¹⁾）でもあると、殆ど異論なく認められている點が北方とは異なる。この語の出現と相前後して、文法や人名にアラブ的要素の強まること⁽²²⁾が、この解釋の傍證となる。

そこで問題となるのが、⁽²³⁾ʿrb(ʾr)と⁽²⁴⁾ʿrb(ʾr)の意義・用法の異同である。アラビア語では通常、⁽²⁵⁾ʿarbがエスニックグループとしての「アラブ人」を表すのに對し、⁽²⁶⁾aʿrabは「ベドウィン」を表すという區別があるが、碑文南アラビア語ではどうであろうか。従来はその區別はないという意見が支配的であったので、私も舊稿においてそれに従い、いずれの形で出て來た場合も「ベドウィン」と譯した。その後刊行された標準的なサバ語辭典でもこの説は踏襲され、形の違ひにかかわらずなく「ベドウィン、ベドウィン傭兵」という譯語が與えられている⁽²⁷⁾。それに對しロバンは、近刊書の中でこの問題を再検討した結果、碑文南アラビア語の場合はアラビア語とは異なり、むしろ⁽²⁸⁾ʿrbが「遊牧民 (nomades)」を意味することに對し⁽²⁹⁾ʿrbは通常「アラブ人 (Arabes)」(=aʿrab)を表す、但し文脈により「遊牧民」(=aʿrab/aʿarib)という意味を表すこともあるとの結論に達した⁽³⁰⁾。

私も今回、表に舉げた用例を改めて検討した。その結果、舊稿において輕々に通説に従ったのは誤りで、この二つの形の用法には、少なくとも次の二點で違ひのあることが判明した。まず⁽³¹⁾ʿrbは、一例⁽³²⁾(nos)を除き、すべて限定辭が附いた⁽³³⁾ʿrbnという形で使用されているのに對し、⁽³⁴⁾ʿrbはその點まちまちである。次に、族名と列記される場合には、必ず⁽³⁵⁾ʿrb(ʾr)の方が使用されている⁽³⁶⁾。ただこれだけの違ひから、意味の違ひまでを推し量るのは無理かもしれぬが、族名と列記される際に⁽³⁷⁾ʿrb(ʾr)の方が使われるのなら、ロバンの結論とは逆に、むしろこちらがアラビア語の⁽³⁸⁾ʿarbと同様、エスニックグループとしての「アラブ人」を意味している可能性が高いのではなからうか。そのように考え、表の中では試みに⁽³⁹⁾ʿrb(ʾr)を「アラブ人」、⁽⁴⁰⁾ʿrb(ʾr)を「ベドウィン」と譯した。ただ六世紀の三例⁽⁴¹⁾(nos. 56~58)のように、全く同じ文脈の中で「町の住人 (hab.)」に對立する語として⁽⁴²⁾ʿrb⁽⁴³⁾ʿrb兩方の形が使われている場合もあるから、一概に兩者の意義に區

別を附けるのはやはり無理なのかもしれない。今後さらに検討を重ねたい。

キーワードとして次に着目したのが 'srt (pl. 'sr) という語である。これは 'rb/'rb よりさらに遅く、三世紀初頭の碑文 (No. 15) に初めて現れる。やはりアラブ・ベドウィンの進出に伴って南アラビアでも使用されるようになった、北方起源の外來語である。ビーストンはこれをアラビア語の 'asīra (pl. 'asā'ir) の意味・用法をもとに、「ベドウィンの系譜に基づいて組織された集團 (Groups organized on the beduin basis of genealogy)」と定義し、「系譜ではなく地縁に基づいて組織された定住民の集團 (Groups of sedentaries organized on a territorial and not a genealogical basis)」である s'rb (pl. y'rb) (アラビア語では sa'rb, pl. su'arb) に對置) した。

この語を見出せる碑文は八點 (Nos. 15, 37, 39~41, 45, 51, 54) を数えるのみで、それほど多くはない。いずれの場合にも、具體的な族名を伴って用いられているのが特徴である。後で見ると、同じ集團が 'srt/'sr と呼ばれたり s'rb/y'rb と呼ばれたりしている例がいくつかある。のみならず、一般にアラブ・ベドウィンと認識されている中央アラビアのいくつかの部族を s'rb/y'rb と呼んでいる例もあり、必ずしもビーストンが言う意味の違いを心得たうえで、兩語の使い分けがなされていたとは思えない。

しかし、これは言葉の問題なのか、それとも集團の性格の問題なのか。

後で見ると、ビーストンの定義に従えば s'rb とは呼べない集團が、にもかかわらずそう呼ばれているという例は、三世紀の中頃までの碑文に多い。その後、同じ集團が s'rb と呼ばれたり 'srt と呼ばれたりという期間が暫くあって、やがて四世紀になると最早そのような誤用・混乱はなくなる、というのが大體の傾向である。とすれば、三世紀に初めて出現した外來語 'asīra の意味・用法が正しく理解され定着するまでは、それまで南アラビア語で集團を表す唯一の語であった s'rb が、アラブ・ベドウィンの部族集團を指すのにも使われたと解することはできないだろうか。もしそれが正解ならば、マールブを本據地とするサバ固有の部族で、それまでは s'rb としか呼ばれたことのないサバ・カフラーン族が、六世

紀初めの碑文 (Nos. 54) の中で *ḥt* と呼ばれているのは見逃せない。なぜならこの場合には、呼稱の變化はこの部族の性格變化、即ちベドウィン化を表していると考えられるからである。この他には本来 *ḥt* と呼ばれるべき集團が、*ḥt* と呼ばれている例はない。

用語法の混亂には別の解釋も可能である。そもそも定住民と遊牧民は、必ずしもそれぞれが異なる集團に属しているとは限らない。オアシスと砂漠の接點で、定住民と同族の者が縁者の家畜も預かって遊牧を行うのは、現在でも珍しくない光景である。またこれもよく知られているように、アラブの系譜というのが多分に擬制的なもので、地縁や政治的な關係がやがて系譜上の親族關係として表現されるというのも、しばしば見られる現象である。高原地帯の周邊の諸族は、*ḥt* と *ḥt* とともに明確に割り切れない集團、或いはその兩方を包み込む集團であり、それが碑文の中でも用語法の混亂という形で現れた、というのが第二の解釋である。ハウラーン族とサラートの諸族についての *ḥt*/*wḥr* という表現 (Nos. 37, 38) など、まさにその好例と解することもできよう。

いずれの解釋を採るべきか。用語法に時代差が見られる以上、私としては原則的に第一の解釋に與したい。即ち、三世紀までは用語法に混亂が見られ、*ḥt* と呼ばれるべき集團が *ḥt* と呼ばれることもあった（しかしその逆の現象はない）が、四世紀以降はそのような混亂は影を潜めた。但し、定住民と遊牧民が混在していたと思われるハウラーンやサラートの場合には、用語の混亂と見えるものが、實は集團の生體を正しく反映しているという可能性も捨て切れない。

さて、表を作成するうえでもう一つの手懸かりとしたのが、碑文の中で言及されているアラブ・ベドウィン集團の名稱である。これにはいわゆる氏族名、部族名、部族連合名等の様々なレベルのものがあるが、ここでは集團の大小にかかわらず「族名」と總稱する。

いま右に述べたことから窺えるように、南アラビアの定住社會と遊牧社會の境界部には、果たしてアラブ・ベドウィンと見做せるか否か、その見極めの難しい集團が多數存在した。そこで問題は、何を目安に目的の集團を識別できるかと

いうことである。

本稿では、いずれかの碑文の中で一度でも $\text{'d}^{\text{h}}/\text{'d}^{\text{h}}$ もしくは $\text{'s}^{\text{r}}/\text{'s}^{\text{r}}$ と呼ばれている集團は、すべて選別の対象とした。當該集團が他の箇所でも $\text{'s}^{\text{b}}/\text{'s}^{\text{b}}$ と呼ばれていたり、或いは「アラブ」や「族」に當たる語を伴わず、族名だけが言及されている場合でも、その族名に言及している碑文は表に挙げた。またアラブ・ベドウィンであることが廣く一般に認められている集團や、その首長の名が出てくる碑文は、一應無條件にリストアップしたうえで、何か問題があればその都度個別に對處することにした。

以上の條件の少なくとも一つを満たして、いささかなりともアラブ・ベドウィンに言及していると認定できた南アラビア碑文は、年代順に表に並べた全六〇點である。實はこの他、テクストの言語學上の特徴や、言及されている人名をもとに、アラブ的要素の増大を論じるに足る碑文が相當數存在するが、今回はこれらを分析するまでには至らず、今後の課題として残した。

二 南アラビア諸王國とアラブ・ベドウィンの關係

本章では、第一章で作成した表の記事をもとに、南アラビア諸王國とアラブ・ベドウィンの關係の變化を、いくつかの段階に分けて整理する。最初に斷っておかねばならないのは、これまで收集・整理された碑文は壓倒的にサバ語のものが多いという事實である。これは南アラビア諸王國の中で、サバ王國が最も長く存続し、支配した領域も廣範圍にわたったのが最大の理由であるが、他の諸國の調査がまだ十分でないという事情も預かっている。いずれにせよ、主としてサバ語の史料をもとに研究を行うことの限界を、肝に銘じておきたい。殊にハドラマウトは、地圖を見ても明らかなように砂漠との接線が非常に長く、それだけにベドウィンとの關係も深いものがあつたと考えられるが、サバから最も遠く離れていため、その實態はよく分からない。

1 紀元前の時代

初めにも述べたように、諸王國と周邊のベドウィン社會との間には、當然かなり早い時期から何らかの關係があったことであろう。しかし紀元前のこの時代には、それが碑文史料の上に具體的な形ではあまり反映されていない。そのような状況の中で、兩者の關係の一端を、それも非常に早い時期に窺わせる碑文二點を表に挙げた。

最初のは、サバの支配者カリブイル・ワタルの有名な戰勝記念碑文である。このカリブイル、及び彼に先んじてサバを治めたイサアマル(Yi^{am})と、前六八五年と七一六／五年に、アッシリア王センナヘリブとサルゴン二世にそれぞれ貢納の記録が残っている、サバ王カリビル(Karib'ilu)及びサバ人イトアマラ(Y'annara)を同定できるか否かが、長年サバ王國の、ひいてはサイハド文明の成立時期を巡る論争の鍵となってきた。この同定を認め、サバ王國の成立を前八・七世紀とする長期編年説が、近年の發掘調査の成果を踏まえて最近は優勢で、本稿でも一應これに従っている。⁽²⁸⁾

さて、この碑文で言及されているアミール族については、これより紀元後の時代に至る長い期間にわたって史料の中に記事が散見するので、かなり詳しいことが分かっている。⁽²⁹⁾ ジャウフの北方ナジュラーンの周邊で、古くから多數のラクダを飼育し、隊商交易にも携わっていた半定住・半游牧の集團であつたらしい。ズー・サマーウィー(Dj. Samawi)という神を守護神として崇拜し、ブロンズ(金メッキの?)のラクダ像を多數奉納した。⁽³⁰⁾ 彼らが「アラブ」と呼ばれたり、その集團を指して^{ḥab}という語が使用された例はないが、ジャウフでマイーンの勢力が衰えると、入れ替わりに周圍の砂漠よりこの一族を始め諸族が侵入し、以後ハラムを中心に出土する碑文の言語にアラビア語的色彩が濃厚になるのを見ると、⁽³¹⁾ 彼らがアラブ人であつたことは間違いない。

次にマイーンの名が二番目の碑文に初めて現れる。この勢力の登場前からジャウフにはオアシス都市が散在していたが、その頃の碑文と、その後マイーン人によって殘された碑文を比べると、後者には外來人が移住地の言語で記した文に

特有のぎこちなさが看取できるという。またマイーン人の名は、南アラブ的というより北アラブ的であるともい⁽³²⁾う。さらに、砂漠越えの隊商交易で最も華々しい活躍振りを示したのはマイーンの人々で、サイハド四言語の中で彼らの言語による碑文だけが、南アラビアの外の非常に広い範囲から発見されている⁽³³⁾。これらの事實は、元來はアラブ系のベドウィンであったマイーン人が、他の同類の諸族に先驅けて逸早くカルナウを中心とするジャウフの一角に定住し、この地の言語を書き言葉として習得、そしておそらく定住前から従事していた長距離交易を一層發展させて、サイハド四王國の一つとしての地位を築いたことを示唆しているのではなからうか。

このように、僅かな史料を通じて、紀元前のかなり早い時期からアラブ・ベドウィンの浸透が感知されるが、この段階では、それはまだ北部のジャウフ近邊に限定されていた。それが紀元後の時代になると一變する。

2 一世紀～三世紀初頭

表に擧げた十二點の碑文 (Nos. 3-14) がカバーする時代である。これらの碑文の記事から、アラブ・ベドウィンの浸透が南アラビア全域に及び、高原部の諸族までがその脅威に晒される一方で、諸王國が彼らの武力を傭兵という形で取り込みつつある様子が看取される。以下、少し細かく見ていこう。

一世紀に屬すと言えそうなのは、辛うじて最初の二點だけである。一方では盜賊として、他方では傭兵として言及されていて、この時期以降の彼らの南アラビア社會とのかかわり方を、最初の段階で既によく示している。その後彼らの活動が及んだ範囲を見ると、サバ、カタバーン、ハド라마ウトと、サイハド砂漠の縁邊の諸王國すべてと關係を持っただけでなく、おそらく二世紀のものと思われる一碑文 (No. 6) によれば、南部高原を本據地とするヒムヤルとも何らかのかかわりを有していたらしい。さらに三世紀初めの碑文 (No. 11) には、ハバシャ、即ちエチオピアの軍勢とともに北部高原のサバのハーシド族の領域を西から脅かしたと記されているから、紅海沿いのティハーマとワディの流域にもその勢力が及ん

でいたことになる。

因みにこのハースド族は、二世紀中頃の別の史料(No.7)でも領域をベドウィンに脅かされたように記されている。しかしその一方で、右に見た碑文(No.14)によれば、領域内にベドウィン移民の子孫を抱え込んでいた。紀元前の時代に既にアラブ・ベドウィンの影響が強まっていたジャウフから、次の時代にはワディ傳いに南西の高原地帯へ侵入が圖られたのは當然の成り行きであった。先行集團は移住して既に數世代が経過し、定住先の住民とも安定した關係を結んでいるように見える一方で、後續集團がハースド族領の他、ジャウフの上手のマンヒヤ(No.8)やヤルスム(あるいはユルサム)族領の東方(No.10)でサバ人と戦っている。

一〇〇年頃のサバ碑文(No.4)に出てくる「傭兵」は、文脈から見て、まず間違いないアラブ・ベドウィンであろう。首都マールリブの城外にでも駐屯しているはずのものが、理由は分からぬが無断で、おそらくは砂漠の何處かで幕營している一族のもとへ歸ろうとしたのを、追跡してマールリブに連れ戻したのではあるまいか。時代は下るが、四世紀初めの碑文(No.5)にも同じような事件が記録されている。ベドウィン傭兵の生體的特徴的な一面が窺えて、非常に興味深い。

二世紀末にヒムヤル軍と他の諸勢力の連合軍が争ったことを伝える一碑文(No.13)は、この時期としては珍しく、サバではなくヒムヤルの碑文である。敵側のサバとハドラマウトの軍勢が、それぞれ正規軍部隊とベドウィン部隊で構成されていたことが明記されている點で貴重な史料である。従来諸王國の軍勢は、王直屬の正規軍と、必要に応じて各部族から派遣される部隊で構成されるのが普通であったが、この史料によれば、ベドウィンの傭兵部隊が正規軍のそれに次ぐ重要な役割を果たしている。ただこの段階では、まだ彼らの族名や族長名への言及はない。傭兵となるのは集團の一部で、彼らが氏族(もしくは部族)単位で王國の軍勢に加わるということは、まだなかったのであろう。

二世紀以降、サバにとって悩みの種の一つになったのが、北方のサアダ市を中心とした廣い範圍に大きな勢力を持つハウラーン部族連合であった。アミール族同様、サイハド文明の周邊部に位置し、南方の諸王國の影響を受けつつも、その

支配を嫌って獨立を志向した。しかし獨力でそれを達成・維持するだけの力はなかったので、その時々的情勢次第でサバ、ヒムヤル、ハバシャのいずれかに従っている。彼らの集團はこの時期の碑文 (Nos. 6, 11, 13) の中では šb (もしくは šb) と呼ばれるが、三世紀後半には $\text{šb}/\text{wšr}$ (No. 37)、四世紀に入ると šr (No. 45) と呼ばれるようになる。先程述べたように、これは用語法が次第に正確になったということなのか、それともサバ人の目から見て、元來は彼らと同じ定住民であったハウラーン族が、徐々にベドウィンの性格を強めていったということなのか。

因みに二碑文 (Nos. 11, 14) に出てくるハウラーンの ḥn という人名／族名(家族／氏族?)は、アラビア語名 al-Ḥn の南アラビア語形である。そこから見て、アミール族と同じく彼らもアラブ系であった可能性が高い。砂漠に居住したアミール族がラクダ飼育とラクダを使った運送業に活路を見出したのに對し、ハウラーン族はその西方の高地に定住し、おそらく半農半牧の生活をおくっていたのであらうと思われる。

この時期の最後の碑文 (No. 14) に登場するサラートの諸族が、以後、サバにとってもう一つの大きな悩みの種になる。サラートはイエメン山地の分水嶺の西側地域で、碑文の中では紅海に沿ったティハーマの平地までを含んでいる。サイハド文明は内陸部に榮えた文明であったため、この頃まで碑文から得られるサラートに關する情報は極めて乏しい。二世紀後半にエチオピアからアクスムの勢力が紅海を渡ってこの地に侵入を始めて、ようやく南アラビア碑文の中にサラートの諸族に關する記事が見られるようになった。地理的には農業の行われている山地やワディ沿いの地域と、ラクダ遊牧が優勢な砂漠地帯、それに漁民の住む海岸部に分けられる。サラートの住民を指すには通常 dšrtn という表現が使われた。ハウラーンの場合と異なり、サラートの部族相互間に特につながりやまとまりはなかったが、ひっくるめて「諸族」と呼ばない場合には、碑文では šb という語を使っている (Nos. 27, 41, 42)。しかし一例だけであるが $\text{šb}/\text{wšr}$ という表現もある (No. 41)。ともかく用例がこれだけなので、ハウラーンについて見たような用語法の時代差を認めることはできない。

これも因みに、次節の最初の碑文 (No. 15) に出づくるサラートの一部族の名稱 *šr'm* は、アラビア語名 *al-As'ar* の南アラビア語形である。六世紀前半の二碑文 (Nos. 56, 58) にも出てきて、當時この一族の領域がムハーを中心とした半島の南西隅にあったことが看取できる。二世紀のプトレマイオスの『地理學』第六卷第七章第七節で、まさに同じ地域がエリスレス（またはエレ・サレス）地方 (*Elisarōn/Elisarōn chōrae*) と呼ばれているのは、この定冠詞ぐるみのアラビア語名のギリシア語形と一般に解されている⁽³⁴⁾。ここから、サラートでも特にティハーマでラクダ遊牧に従事していた部族はアラブ系であったことが推測される。ハバシヤとともにハーシド族領を侵そうとしたというペドウィン (No. 16) とは、多分彼らの一派のことであろう。

要するに、ハウラーン族のいた地方とサラートはともにサイハド文明の周縁部に位置し、似たような状況に置かれていたと見てよい。正確なことはよく分からぬにしても、かなり古くよりアラブ系の人々が住みつき、それぞれの地の自然條件に即した生活形態を採っていたと考えられる。その一部はラクダ遊牧を生業とする、まさしくアラブ・ペドウィンであったろう。彼らの集團を指す語として *šr'm* が使用されている例もあることが、それを示している。しかし彼らを指して *h'd' h'd'* と呼んでいると思われる例は、紀元前にはもちろん皆無であるし、この語が碑文南アラビア語の中に入ってきた紀元後においても、右に挙げた一例を数えるのみである。彼らへの言及がなされる場合には、「アラブ人」とは呼ばれず、はっきりとそれぞれの族名が挙げられるのが普通であった。これらの事實は、おそらく南アラビア人が、古くより周縁部に住んで交渉のあったアラブ人と、新來のアラブ・ペドウィンとを區別していたことの現れではなからうか。

以上を考え合わせると、*h'd' h'd'* という語は、北方から押し寄せたアラブ・ペドウィンの新たな波とともに南アラビアに傳來した、と考えてまず間違いないまい、第一波の到來した正確な時期は定めがたいが、二世紀には砂漠の縁邊部のみならず高原部まで彼らの浸透が進み、諸王國がいずれも軍事的に彼らの武力に強く依存しているのを見ると、それは碑文の中に初めてこの語が現れるのよりも早く、おそらく紀元前に逆上るであらう。

他方、^{٥٦٦} ٥٦٦ の用例の増加と軌を一にして、最初ハウラーン族、次いでサラートの諸族に關する記事も増えるのは、新來のアラブ・ベドウィンの影響の他に、サイハドから見て西の高原地帯に歴史の舞臺が移ったことや、エチオピアからは侵略が行われるという新情勢の中で、これらの諸族の活動も活潑化し、サバやヒムヤルとの和戦兩様の關係が密になった結果であろう。彼らの多くがアラブで、少なくとも一部がベドウィンであることは當時の人々によっても了解されていた筈であるが、碑文の中でそのように呼ばれることは殆どなかった。「アラブ人」とか「ベドウィン」と呼ばれているのは、原則として新來の人々であつた。

3 三・四世紀

時間的には前節と同じく約二世紀の間に、ここでは三八點もの碑文(Nos. 15~53)が集まつている。それも三世紀にそのうちの三〇點が集中している。その主たる理由は、そもそもこの世紀に屬す碑文そのものが、他の時期に比べて飛び抜けて多數發見・收集されているという事情によるのであり、必ずしも三・四世紀に、例えば次の二世紀間に比べてアラブ・ベドウィンの活動が活潑であつたとか、彼らと南アラビア諸王國の關係が密接であつたという譯ではない。

この時期の最大の特徴は、それまでアラブ・ベドウィンに對してどちらかと言えば受け身であつたサバやヒムヤルが、一轉して軍事的にも外交的にも攻勢に出た點にある。そして舞臺はサイハド砂漠や高原の周邊から、一舉にアラビア半島の中央部にまで擴がった。それとともに、よく名の知られたいくつものアラブの有力部族が、碑文の中に姿を現すようになる。

その嚆矢となつたのが、三世紀初頭の碑文(No. 15)に記された、サバ王シャル・アウトタルによる半島中部の重要都市カルヤ・ザート・カーヒル(略してカルヤ)への遠征であつた。この町は南アラビアとペルシア灣岸を結ぶ陸路上の要衝で、一九七二年以來ファウ Qaryat al-Fau にある遺跡の發掘が、アンサーリー教授 A. R. al-Ansary を中心にリヤド大

學調査隊の手で行われている。⁽³⁵⁾ 出土した碑文から、ここが紀元前三世紀頃から後三世紀頃へかけてアラブ人の隊商都市であったこと、また初期にはマイーン商人の居留地となっていたこと等が判明した。⁽³⁶⁾

さて右の碑文によると、ここで「キンダとカフターンの王、サウル族のラビーア」が、シャル王の率いるサバ軍の攻撃を受けている。族名を導く「𐩦𐩣𐩪」及び族的歸屬を示す「𐩦𐩣𐩪𐩣𐩪𐩣𐩪」という表現は、そもそも表現自體が南アラビア語のものではなく、サウル族がアラブ系であることを示している。因みに後のアラブの傳承によれば、キンダはサウルのラカブ（添え名・渾名）であった。遠征軍はその後西へ轉進し、アスド族領近くのスマル⁽³⁷⁾で、カルヤに味方したユハービル族と交戦した。これは、半島中部へ向けての軍事行動を伝える最初の史料であるだけでなく、三世紀初頭のキンダ、カフターン、アスドの位置を示している點でも極めて貴重な記録である。

ところでこれとほぼ同じか、やや早い時期の「カフターンとマズヒジュの王、[?]族でカフターン人の、ラビーアの息子ムアーウィヤ (M'wyt/bn/Rb't/d'1/[My]tLy/Q]hiny/mk/Qhin/wMdhg)」の墓碑が、カルヤ遺跡の發掘で出土した。⁽³⁸⁾ 碑文は南アラビア文字で刻されているが、言語は若干サバ語の混じったアラビア語である。さらにシャルの次にサバの王位に就いた兄弟王イルシャラフとヤーズィルの一碑文 (No. 20) には、「キンダとマズヒジュとベドウィンの王、ブッドの息子マールイク」への遣使が記されている。これらの記録から、當時カルヤを中心にしてアラブの政權が存在したことは分かるが、それを構成していたカフターン、キンダ、マズヒジュの三部族相互の關係は明らかでない。また後二者がこの後の碑文にもしばしば登場するのに對し、カフターン⁽⁹³⁾への言及は右の二例に限られる。

シャルのカルヤ遠征の理由・目的については想像するしかない。表には記さなかったが、サバ軍はカルヤに向かう前に、手前のナジュラーンでハバシャの部隊と交戦しており、これが一つの手懸かりになるかもしれない。この當時エチオピアのアクスムの王は、海上交易ルートの支配を狙って紅海沿岸を制壓しただけでなく、陸上隊商路の支配をも目指したのか、シリアルとベルシア灣ルートの分歧點にあたるナジュラーンをしばしば占領している。サバ軍がこの勢力を打

破した後に、さらにカルヤに進んでキンダ王と戦ったということは、シャルの遠征の目的が、ペルシア灣岸に向かう隊商路の掌握にあったことを示しているのではないだろうか。

次のイルシャラフ王の時代に、アラブの族長への遣使を記録した碑文が二點残されている。最初のは既に觸れたヤーズイルとの共治時代のもの(No. 20)で、「アスドの王、カアブの息子ハーリス」と「キンダとマズヒジュとベドウィンの王、ブッドの息子マールク」の許へ使節が派遣されている。キンダ族とアスド族がともに言及されているのはシャルの遠征の際と同様で、依然カルヤとスマール近邊をそれぞれの根據地としていたのであろう。もう一點(No. 35)は三世紀半ばのイルシャラフ單獨統治時代に屬し、ガッサーン、アスド、ニザール、マズヒジュの諸族の長への遣使を傳えている。ガッサーン族とニザール族のこの時期の正確な居住地は不明だが、約百年後の碑文(No. 51)によると、メッカの東北東のスイーイを挾んで對峙していた。

アスド族とともに名の擧がっているのは、ここではキンダ族ではなくマズヒジュ族である。因みにこの約半世紀後の狀況を傳えているのではないかと思われるナマール碑文(詳細後述)でも、アスドやニザールとともに名前の擧がっているのは、キンダではなくマズヒジュなのである。これは決して偶然とは思えない。と言うのも、やはりイルシャラフとヤーズイルの共治時代の一碑文(No. 28)から、先の遣使(No. 20)の後でサバとキンダの間に何か大きな紛争の發生したことが窺えるのである。紛争の内容自體への言及はないが、事後處理として、キンダ側から王子やシェイク達の息子を含む人質⁽⁴⁰⁾及び賠償として多數のラクダがサバ王に引き渡されたと記されている。これを境に、南アラビア碑文からキンダ王やカルヤを本據地とするキンダ族への言及が全く影を潜める。そして數十年後に、南アラビア諸王國、特にヒムヤルにおいて軍の一翼を擔う勢力として、キンダは再び碑文の中に姿を現すのである。おそらくこの空白の數十年の間に、キンダ族の主力はカルヤを後にし、サイハド砂漠の緣邊に移住したのではないかと思われる。

このような中央アラビアの諸族を對象とする軍事・外交活動にも増して頻出するのが、前代に引き續きサラートとハウ

ラーン、さらにアスィール地方に向けた遠征の記録である。この方面での戦いは、サバとヒムヤルの間の百数十年來の抗争や、エチオピアからのアクスムの侵入と絡み合つて複雑な様相を呈していた。アクスムはこの時期、劣勢のヒムヤルを支援してサバに對抗することを基本的な戦略としていたのである。

サラートはほぼ全域が彼らの支配下にあった。サワー市がサラート南部のアクスム軍の據點であつた (Nos. 21, 23)。したがつてサバ軍のサラートへの遠征は、ベドウィン集團の討伐というより、アクスム軍とこれと連携する勢力を打ち破り、既にワディ沿いに定着しつゝあつた移住エチオピア人を驅逐することを第一の目的としていた。しかしイルシャラフ時代の具體的な遠征先として、スィハムとスルドッドの兩ワディ (No. 23) の名しか擧がっていないのを見ると、碑文の中で華々しい戦果が誇られているのとは裏腹に、サナーへの直接的脅威を除去するのが精一杯であつた實情が讀み取れる。

アクスム軍に加擔したサラートの諸族の中で、最大の勢力はアック族であつた。都合六碑文 (Nos. 27, 29, 30, 40, 41, 51) の中で言及され、そのうちの二碑文 (Nos. 29, 51) から、彼らが右記の二つのワディの流域にいたことが確認できる。イスラム期にも先述のアシユアル族の北方に展開していた大部族であつたことが知られている。⁽⁴¹⁾ 中に一點だけではあるが、これを ²⁹ と呼んでいる碑文 (No. 29) が、アシユアル族同様、アラブ系であつたことを推測させる。

他方、ハウラーン族に對するサバ王の支配は、この時期比較的稳定していたようである。イルシャラフとヤーズィルの時代に一度遠征が行われた (No. 33) 後は、サアダ市にアーキブ (代官) が任命されて統治に當つた (No. 24)。ここは、アスィール地方に向かうにもナジュラーンを経て半島の中央部に向かうにも要となる、サバにとつて死守せねばならぬ土地であつた。しかしイルシャラフを繼いだナシヤアカリブ王の下で起きた大反亂 (No. 33) から、當地の諸族の強い獨立志向性が窺える。戦場となつたのは、サアダ西方のワディ・パールやフラブの流域であつた。⁽⁴²⁾

記述がサバに偏つてしまつたが、この時期ハド라마ウト王國でも首都のシャブワにはベドウィン部隊が駐屯し (No. 16)、

式典にはアスド族からの出席があり (Nos. 17~19)、軍の指揮はマアッド族を始めとするアラブ・ベドウィンの首長に委ねられていた。アスドやマアッドといった中央アラビアを本據地とする部族が、一部とはいえこの地にまで進出してきたのが注目に値する。

さてヒムヤル王シャンマルによって、三世紀末にサバとハドラマウトの二王國が併合され、ここに統一ヒムヤル王國が誕生した。そしてそれを機にアスィール地方への遠征が活潑化する。遠征先として名の擧がっているワディは、北からリーム (No. 40)、イトワド (Nos. 45, 46)、ダファー (No. 46)、ダマド (Nos. 41, 43)、それにサラートのリヤー (No. 46) である。しかしワディ・リームとイトワドで戦いの相手となっているのは、先にサバ王ナシャアカリブに對して反亂を起こしたハウラーン族の一派 DWT であるし、また他の場面でもアスィールへの遠征は、ハウラーン族やサラートの諸族との戦いと一連のものとして記されていることが多い。さらに遠征先のワディを調べてみると、イルシャラフ時代のスイハームとスルドウドから、ナシャアカリブ時代のバールとフラブを経てシャンマル時代のリームとイトワドへと、遠征軍の行動範圍が次第に北の方へ擴がっていくのが看取できる。したがって對サラート／ハウラーン政策に限っては、ヒムヤル王はサバ王の方針を基本的に繼承し、さらに發展させているように見える。そこで疑問となるのが、當時のアクスムの動向である。イルシャラフ時代にサラートに進出していたハバシャ即ちエチオピア人への言及が、シャンマル時代以降の碑文に皆無なのは一體どういう譯なのか。

多くの研究者は、シャンマルが南アラビア統一事業の一環として、アクスムの勢力をアラビア半島から一掃したと考へ、これをもって右の問いへの解答としている。これに對し私は、碑文以外の諸種の史料の検討に基づいて次のように反論した。⁽⁴³⁾ 即ち、シャンマルの治世の始めに、アクスム・ヒムヤル間に一種の和平協定が成立し、それが基本的には遵守されて兩國間に大きな衝突が起らなかったことが、碑文からアクスム／ハバシャ關係の記事が姿を消した最大の理由であろう。ヒムヤルの南アラビア統一も、アクスムの支援があつて初めて實現したと思われるので、その後の兩國の關係も平

等ではなく、ヒムヤル王はアクスム王に従属していた。前者がこのような立場に甘んじたのは、併合後も反亂の絶えないハドラマウト(Nº. 66g)と、この後見る北方からの新たな脅威への対策が、優先課題であったからに違いない。

ところが私のこの説にとつて、シャンマル時代以降のヒムヤルとサラートの關係が最大の障害となる。前代まではアクスム軍とともにサバ軍と戦っていた、つまり味方であった筈のアック族を筆頭とするサラートの諸族と、何故にヒムヤルは戦わねばならなかったのか。思うに、碑文から姿を消したアクスム軍は、少なくとも戦場となっているワディ・スルドゥド以北の北サラートからは、實際に撤收したのであろう。それを機に、元來、東西いずれの勢力にも従属するのを嫌う諸族が、一齊に獨立を圖ったのではあるまいか。四世紀半ばの碑文(Nº. 65)を見ても、王の代替わりの度に、先ず北サラートへの遠征が行われていて、この地域ではヒムヤルの支配が極めて不安定であったことを物語っている。他方、サワール市を中心とする南サラートと、アデン灣に面した南岸に關する情報は全くなく、半島南西隅のこの一角が、引き續きアクスムの支配下に置かれていたことを推測させる。

南アラビアからの遣使の記録で最も重要なものと言えば、疑いもなくシャンマルからササン朝の王都への遣使を傳える碑文(Nº. 46)であろう。目的地の QTWŠF と KWK は、⁽⁴⁴⁾ミューラー W. W. Müller によりクテシフォンとセレウキアに比定されている。⁽⁴⁵⁾この時、使節はアスドの族長とタヌーフ族を訪れることをも任務としていた。それぞれの用向きは、例によって碑文の中には記されていない。しかし此の度に限っては、それを窺わせるに足る別な史料が存在する。それが先にも觸れたナマール碑文である。

これはシリアのナマールで發見された、アラブの大族長イムル・ル・カイス Imru' al-Qays の墓碑で、西曆に換算して三二八年の紀年がある。ナバタイ文字で書かれているが、使用されている言語はアラビア語で、イムル・ル・カイスの生前の治績、特にその支配の及んだ範圍が記されている。碑文テキストの解讀と解釋には少なからぬ異論があるが、⁽⁴⁶⁾大方の意見の一致しているところを記すと、まず彼は「アラブ人の王」と自稱し、アスドの兩族とニザールを支配したこ

とを述べる。次いでマズヒジュを打ち破ってシャンマルの町ナジュラーンに至り、さらにはマアッドをも従えたことを誇っている。

一般にこのイムルウ・ル・カイスは、アラブの傳承が伝えるラフム朝の第二代目の王に比定されている。父王のアムルは、バルミユラの女王ゼノビアに謀殺されたと伝えられるタヌーフの族長ジャズィーマ *Gadīma* の甥である。そしてこのジャズィーマも、南シリアのウンム・アル・ジャールで發見された碑文（ナバタイ語とギリシア語のバイリンガル）に名を残す「タヌーフ王 *Gdymt/Gadimathos*」に比定され、歴史的に實在したことが確實視されている。因みにタヌーフはペルシア灣岸近くの、地圖1のハジャールあたりで結成されたアラブの大部族連合で、ササン朝成立後その壓力に押されて北上、ヒーラからユーフラテス河畔のアンバールにかけての地に移住したと伝えられる。アスド族の一部もこれに加わり、ジャズィーマ自身もアスドであったという。⁽⁴⁸⁾ なおヒーラは、ジャズィーマの死後は、その後を繼いだ形のアムルの王朝の本據地となった。ただ、その息子の墓がシリアにあるのは問題で、ササン朝とローマの間でラフム朝が如何なる立場を取ったかという問題とも絡んで、論議が續いている。⁽⁴⁹⁾

さてナマール碑文に話を戻すと、そこに列擧されている族名はいずれも既に見たものばかりである。アスドの兩族と言えば通常はサラートとオマーンのアスドを指す。南アラビア碑文の記述によれば、アスドの少なくとも一部はスマールあたりに、ニザールはそれより北のスィーイのいずれかの方角に、マズヒジュはカルヤあたり、マアッドはこの後見るように、スィーイからハリパーンを経てハルジュに至る、まさに半島の中央部に廣く展開していた。その中で本稿の、しかも現在の問題から見て重要なのは、イムルウ・ル・カイスがシャンマルの町ナジュラーンにまで迫ったと記されている点である。四世紀初頭と思われる遠征の年代と、當時の南アラビアの政治情勢から判斷して、このシャンマルがヒムヤル王ジャンマル・ユハルイシュであることは、まず間違いない。

ナジュラーンが征服されたとは記されていないので、ヒムヤル側にとってみればイムルウ・ル・カイスの來襲も、それ

自體は珍しくもないベドウィンの略奪行爲の一つと受け取られたかもしれない。しかし長い間サバが軍事・外交両面で深い關係を維持してきた中央アラビアの諸族が、イムルウ・ル・カイスの支配下に入ることは、サバの後繼者を以て任じるヒムヤルにとって、到底認めがたいと同時に大きな脅威と感じられたに相違ない。このように考えるならば、シャンマルの北方への遣使は、この危機を克服するための方策の一つと解するのが最も當を得ているのではなからうか。ササン朝以下の勢力がこの使節にどう對應したかは不明である。ともあれこの事件が、その後二世紀半にわたって續く、中央アラビアの霸權を巡るヒムヤルとラフム朝の對立の始まりであった。

シャンマル時代で他に注目すべき點を二つ指摘しておく。第一に先にも少し觸れたように、キンダの名が再び碑文の中に現れ、しかも今回はヒムヤル軍の重要な一翼を擔って活躍している。ただ、彼らがすべてヒムヤル王に仕えた譯ではなく、一部は敵のハドラマウト側についていることを示す史料(No. 83)もある。第二に、おそらく彼の晩年のものと思われる一碑文(No. 84)が、ヒムヤル王國內のすべてのベドウィン部隊を統率する指揮官職の存在を示唆している。この碑文では生憎肝心のところに缺損があつて、これを確認できないが、次の二代の王の碑文(No. 85)では、この點が明らかである。またヒムヤル軍を構成したアラブ・ベドウィンの部族名が明記されているのは、この頃には彼らがかかなり大きな集團を單位として、ヒムヤル王の傭兵となつていたことの現れであろう。

近年刊行されたアバダーン碑文(No. 81)は、四世紀の三代にわたるヒムヤル王が行った遠征を記録した貴重な史料である。これによって、從來全く知られていなかった、この世紀のヒムヤルと中央アラビア諸部族の關係に光が當たるとともに、この時期における有力アラブ部族の分布狀況が、同時代史料によって幾分か明らかになった。⁽⁵⁰⁾

まずサアラーン・ユンイム王が即位後、ハドラマウト、マハラを轉戦した後、ヤブリーンに遠征しているのに驚かされる。おそらくマハラから北へ、ルブ・アル・ハーリー砂漠を越えるルートを取ったのであろう。またこれとは別に、こちらには通常のルートを取って北に進み、アスド族の領域でその支族と思われるスダーイ、ラサンの兩族と戦った後、さらに

現在のヤママに當たるジャウとハルジュまで進軍して、マアッドの諸族と交戦している。次のサアラーン・アイファ王の治世にはサラートへの遠征しか記録されていないが、ザマルアリー・アイファの時代になると再び北へ遠征軍が送られた。キンダやマズヒジュとともに、サアラーン・ユンイム時代にはヒムヤルに敵對していた諸族も従軍している。因みにマズヒジュは、イムルウ・ル・カイスに討たれたとナマール碑文に記されてから後は、専らヒムヤル軍の中でキンダとともに言及されている。かつてキンダがそうしたように、カルヤの地を離れて南に移住したのではあるまいか。

ザマルアリーの遠征で主戦場となつたのは、メッカの東北東のスイーイの地で、そこはニザール族とガッサーン族の領域の間に當たると記されている。戦いの相手はやはりマアッドであつた。しかしここでは對象に關する記述が非常に精確で、マアッドの中でもアブドゥ・ル・カイス族、それも支族のシャン、バヌー・ヌクラ、バヌー・サビラの名が擧げられている。アブドゥ・ル・カイス族は後にはペルシア灣岸のバフレインの對岸あたりにいたことが知られているが、この頃にはまだかなり内陸にいたことになる。

このように、三世紀初頭のサバ王シャルのカルヤ遠征で始まつた南アラビア諸王國の中央アラビアへの進出は、地理的には四世紀にヒムヤル軍がナジュド高原の南部に達したところで、ほぼ止まつた。次の時代になつても、ヒムヤル軍自體がさらに北へ進軍することはなかった。この時期の遠征軍は、所期の目的達成後は速やかに歸還したようである、遠征先で支配を恒久化させようとした形跡は見られない。

4 五・六世紀

この時期の特徴は、ヒムヤル王が、右に記したナジュド高原以南の、いわばアラビア半島南半を自らの勢力圏と考え、その支配の恒久化を圖ろうとした點に求められよう。それはこの時期の最初の碑文(No. 63)に既に窺える。これは中央アラビアのマースィルに残されている磨崖刻文で、ヒムヤル王アブカリブ・アスアドのマアッドの地への遠征を記念してい

る。

まず刻文の残されている場所が象徴的である。それまでは中央アラビアへの遠征を記録した碑文でも、南アラビアからしか発見されていない。ところが、この時期のものとして表に挙げた八點のうち、南アラビア出土のものは僅か二點(7os, 54, 59)で、あとはすべてナジュラーン以北の地に残されているのである。次にヒムヤル王の稱號に大きな變化が見られる。アブカリブも、息子のハサン・ユハアミンも、従来の王號に「高地と低地のベドウィン」を付け加えた新しい稱號を帯びている。これは要するに、少なくとも半島南半のアラブ・ベドウィン諸族への支配權を、公に宣言したものと解せる。

ところが、この刻文自体はそれほど長いものではなく、しかも遠征の内容に關する具體的な記述を缺いている。そこで遠征の目的・性格について、既に見た多くの例と同じく軍事的遠征とする解釋と、南アラビアから北方への移住とする解釋に割れている。前者の論據となっているのは、ヒムヤル王アスアド・アル・カーミル *As'ad al-Karnil* (刻文のアブカリブ・アスアド) がイラクに遠征したというアラブの傳承である。⁽⁵²⁾ しかし本刻文には戦いの相手や經過に關する記事が皆無なので、たとえアブカリブが事實そのような大遠征を敢行したとしても、この刻文がそれを記念するものとは思えない。では何か、というところから出てきたのがもう一方の解釋であるが、これはキンダ王國に關する傳承をも考慮に入れている。

と言うのもアラブの傳承では、キンダ王國の建國がアスアド・アル・カーミルの遠征と結び附けて語られているのである。⁽⁵³⁾ それによれば、アスアドによって征服された中央アラビアにキンダ王國が建てられたが、その王には、アスアドの息子ハサン *Hasan* の異父兄弟フジュル *Huḡr Ākil al-Murār* が立てられたという。このハサンと、アブカリブの息子で遠征にも同行したハサン・ユハアミンとの同定について異論はない。またフジュルについては、ナジュラーンの北東のカウカブの近くに残されている刻文の「キンダ王、アムルの息子フジュル *Huḡr/bn/mrm/mlk/Kdt*」がこれに相當するので

はないかと言われている⁽⁵⁴⁾。これらの推定が正しいとすると、三世紀の半ばに中央アラビアで力を失って一旦南に移住したキンダ族は、この機會に少なくともその一部が再び故郷の地に戻り、さらに北方へ發展して王國を再建したものと思われる。先にも記したように、ヒムヤル軍自體がマースィルより北に進出したことを實證する史料はないが、その衛星國的存在となるキンダは、五世紀末から次の世紀にかけて、フジュルの子孫のハリス al-Harith の下で、中央アラビアのみならず北アラビアの霸權をも握るに至るのである。

マースィルにはもう一點磨崖刻文(No. 55)が残されている。百年餘り後のマアディカリブ王の時代のもので、ここでは遠征の目的がアラブ人の「反亂」の鎮定と明記されている。それは約三〇年後のアブラハの時代の別の刻文(No. 56)でも同様で、ここから、先に述べたこの時期のヒムヤル王の、中央アラビアの諸族、就中マアッド族に對する支配權の主張が讀み取れる。これに對し、いずれの反亂でもムンズィルが反亂諸族を支援しているのが非常に興味深い。このムンズィルは、北アラビアにおけるキンダの霸權を覆したラフム朝のムンズィル三世 al-Mundir に比定できる。キンダの勢力が衰えた後の中央アラビアの支配を巡って、ヒムヤルとラフム朝が争っているのである。

ユースフ・アスアル(アラブの傳承のズーヌワース *du Zuhayr*)の時代の三刻文は、いずれも彼が行ったキリスト教徒の迫害に關連している⁽⁵⁵⁾。中の一點(No. 56)はカウカブに、他の二點(Nos. 56, 57)はそれよりややナジュラーン寄りのヒマールに残されている。本稿の主題から見て重要なのは、ナジュラーンのキリスト教徒を攻撃するために派遣された遠征軍の構成、中でもハムダーン族部隊のそれである。「ハムダーン」は元來はハシンド部族の支配氏族の名稱であったが、當時サナーの北方の高原地帯ではハシンド、バキール兩部族間の統合が進み、それによって成立した新集團は、支配氏族の名をとってハムダーン部族と呼ばれるようになっていた⁽⁵⁶⁾。そのハムダーン部族が、三刻文で多少の表現の差はあるものの、要するに町の住人(したがって定住民)とアラブ・ベドウィンで構成されていたというのである⁽⁵⁷⁾。

元來、外來の侵入者で、先住定住民とは生活様式や社會構造を異にするベドウィンが、南アラビア社會に次第に同化し

つつある様子は、早くも三世紀初めの碑文(No.14)で看取できたが、遅くとも六世紀には部族(相變わらず *ʿadī* と呼ばれている)に編入されるところまで進展していたのである。ビーストンの言うように、南アラビアの部族 *ʿadī* が地縁的であることをその本質とするならば、アラブの移住民を編入することに何の問題もないだろう。しかしその移住民がベドウィンであることによって、傳統的な部族も變質を餘儀なくされたのではなからうか。これは單に *ʿadī* の語義の問題ではない。

各地の支配者からの使節到着を伝えるアブラハの碑文(No.56)は、この當時のアラビアの國際關係の緊密さを證する史料としてよく引かれる。アラブの支配者として名の擧がっているのは、ラフム朝のムンズィル三世⁽⁵⁸⁾、これと對立するシリアのガッサン朝のハリス⁽⁵⁹⁾、そしておそらくネゲブとヒスマーあたりを支配していたアブカリブである。これにアブラハを加えた四名が、シリア砂漠までも含む廣義のアラビアの當時の實力者であった。

最後の刻文(No.60)はアブラハのマアッド族に對する遠征を記念したものである。刻文の殘されているのは、カルヤとスマールの間のムライガンであるが、戰場はさらに北方のトゥルバーンとハリバーンであった。これがマアッドに對する四度目の遠征と記されているのが注目値する。おそらくこの時代に限らず、記録も殘っていないような遠征が、他にも幾度となく行われたのであろう。またアブラハと言えば、象部隊を率いてメッカに遠征を企てたという傳説で名高いが、彼が實際に何度も北に遠征軍を派遣したことが、このような傳説を生む素地を提供したとも考えられる。ここでもマアッドの背後には、ラフム朝のムンズィルがいた。

おわりに

以上を簡單にまとめると次のようになる。

サイハド諸王國と周邊のラクダ遊牧民、即ちベドウィンの關係が史料的に窺えるのは、紀元前には北部のジャウフからナジュラーンにかけての地方に限られる。そのベドウィンはアラブ系で、隊商交易にも携わる半定住・半游牧の集團を成

していたようである。マイーン人が推測されているようにアラブ系であったとすると、ジャウフ近邊に限っては、紀元前一千年紀の前半より既にアラブ・ベドウィンの浸透と定住が始まっていたことになる。

一世紀になって、南アラビア碑文に初めて $\text{ḥ}(b)$ という語が、やや遅れて $\text{ḥ}(b)$ という語が現れ、その後その使用例は急増する。北から新たに襲來したアラブ・ベドウィンとともに傳來した語で、多くの場合 $\text{ḥ}(b)$ はエスニックグループとしての「アラブ人」を、 $\text{ḥ}(b)$ は「ベドウィン」を指すという意味の違いが認められる。二世紀には砂漠の縁邊部のみならず高原部にまで彼らの浸透が進み、諸王国はいずれも彼らの武力に大きく依存していた。そこから見て彼らの第一波が到來した時期は、碑文の中に初めて $\text{ḥ}(b)$ という語が現れるのよりも早く、紀元前に逆上ると考えてよいかもしれない。いずれにせよ、諸王国とアラブ・ベドウィンの関係は前代とは様相が一變し、以後、後者は南アラビアの歴史の動向に大きく關與するようになる。

三世紀に入ると、それまでアラブ・ベドウィンに對し受け身の觀が強かったサバが、一轉して軍事的にも外交的にも攻勢に出た。世紀末に南アラビアを統一したヒムヤルも、基本的にはこの方針を繼承し、さらに進展させた。四世紀には遠征軍の行動範圍はさらに擴がり、ナジド高原の南方でマアッド族と度々交戦している。この遠征軍にはキンダを始めとするアラブ諸族のベドウィン部隊が多數加わっていて、軍事的に彼らの占める比重がいよいよ大きくなっていたことが看取れる。

五世紀以降の碑文からは、アラビア半島の南半を自らの支配圏と考え、これを守ろうとするヒムヤル王の明確な意志が読み取れる。戦場や、刻文の残されている場所を見ると、支配圏の北限は、スィーイ、マースィル、ジャウフ邊りにあったようで、これは緯度的にはメッカとメディナの中間に當たる。その後、ヒムヤルの支援を得て再建されたキンダ王國の弱體化によって、ヒーラを本據地とするラフム朝の勢力が中央アラビアに及び、ヒムヤルとの間にマアッド族の支配權を巡る争いが繰り返された。

こうした動きの一方で、南アラビア社會も變質を遂げたであろうことが豫測される。それを知るためには、實は碑文テクストや人名の通時的な分析が不可欠なのであるが、先にも述べたように、本稿ではそこまでは行えなかった。しかし、既に見たところからでも、北部高原に侵入後數世代を経たアラブ・ベドウィンが、現地社會に同化しつつある様子が看取できたし、ハムダーン族がアラブ・ベドウィンの集團を部族内に編入している例もあった。高原部ではこのように、在來の社會が移住者を包み込み同化するという觀が強いのに對し、マリーブなどでは逆に住民のベドウィン化が著しく進んだようであつた。

以上が、碑文史料を通じて見ることのできる、南アラビア諸王國とアラブ・ベドウィンの、特に紀元後六世紀間の關係のあらましである。そこで最後に、⁶¹ *ḥb*/⁶² *ḥb* という語の出現に象徵される新たなアラブ・ベドウィン集團の襲來と、紀元前一千年紀末の南アラビアの大變動との關係の問題が残つた。

從來の説では、南アラビアを通じる隊商路が海上通商路との競争に敗れたことが、經濟的に隊商交易に依存していたサイハド諸國、特にマイーンに壊滅的打撃を與えたとされてきた。⁶¹ 敗北の原因は、エジプトの船乗りや商人が大舉して自ら直接インドへ赴くようになったこと、そしてそれを可能にしたのは、技術的には季節風を利用したインド洋横斷航法の發見、經濟的にはバクス・ロマーナの實現による東方奢侈品への需要の増大と説明された。したがって時期的には、キリスト紀元の轉換期前後ということになる。

ところが南アラビアの變動は、どうもこれより一世紀或いはそれ以上早くに起こつたようなのである。マイーンの滅亡で頂點に達するジャウフ地方の變動の時期が、果たして近年ロバンの主張するように前二世紀に逆上るかどうか、いま一つ確證を缺くのは問題であるが、ヒムヤルの成立はほぼその頃と見て大過ない。⁶² プトレマイオス朝期のエジプト商人のインド進出は、從來の通説よりも早くから盛んであつたようなので、それによつて臨海部やそれに繋がる高原部に一定の繁榮がもたらされたというのは、理解できる。しかしこの時代には、隊商路の北部を押さえるナバタイ王國が未だ衰えを見

せていないことから分かるように、南アラビア・シリア間の際商交易は依然堅調であった。よって、この時期に経済的理由で内陸諸國が衰亡したとは考えられない。そこで當然出てくるのが、アラブ・ベドウィン原因説である。^{4b/4b}と^{4b/4b}と呼ばれるアラブ・ベドウィンは、古くから南アラビア周邊にいたベドウィンと異なり、軍事的に極めて有能であった。であればこそ、高原部にまで浸透しえたのであり、また諸王國は競って彼らを傭兵として重用したのである。彼らの侵入にサイハド文明衰退の主因を求めることができるであろうか。

ここで目を北方に轉ずると、前二世紀後半のメソポタミアではアルバアの活動が猖獗を極め、帝國の常備軍もこれを制御しきれぬ状況にあった。エスニック的に彼らがアラブ人であったかどうかの結論は出ていないが、ベドウィンであったことは間違いない。ではこの時期に彼らの行動が活潑化し、しかも軍事的に優勢となった理由は何か。先の質問には目下答える用意はないが、後の問題にはブリエット R. W. Bulliet のラクダの鞍に關する研究が大いに參考になる。⁶³それによれば、まさに前二世紀に、シャダード shadad と呼ばれる新タイプの鞍の考案を核とする、ベドウィン騎兵の技術革新が起こったというのである。これのみではベドウィンの戦闘能力の向上を説明しきれないにせよ、右記の問いへの一定の解答となっていることは事實である。

南アラビアに新しく襲來したのも、疑いもなく、この技術革新を経て高い戦闘能力を身につけたアラブ・ベドウィンであった。彼らの到來がサイハド諸國に著しい打撃を与え、大變動の直接の原因となったことは十分考えられる。しかしそれが言えるのは、彼らが襲來した時期と大變動の起きた時期との間に、有意の關連が見出せる場合に限られる。この點の解明が現段階ではまだ不十分で、今後さらに検討を重ねたい。

略號表

AAKM: Ch. Robin (ed.), *L'Arabie antique de Karībil à diterranée*, No. 61, 1991-3, Aix-en-Provence, [1992].
 Malomet (= *Revue du Monde Musulman et de la Méditerranée*), Roma, 1959.

BiOr: *Bibliotheca Orientalis*.

BSOAS: *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*.

JAOS: *Journal of the American Oriental Society*.

JESHO: *Journal of Economic and Social History of the Orient*.

JRAS: *Journal of the Royal Asiatic Society*.

JSS: *Journal of Semitic Studies*.

PACF: H. Loachmeur (ed.), *Présence arabe dans le Croissant fertile avant l'Hégire*, Paris, 1995.

PSAS: *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies*.

註

(1) ラムラ・アッサブアタイン (Ramlat al-Sab'atayn) は現在
の名稱。中世のアラブ地理學者達はサイハド (Sayhad) と呼
んだ。

(2) 元來はビーストンが「マーン・サハ・カタバーン」など
ラマウワの四語をサイハド語 (Sayhadic) と命名したことに
由來する。A. F. L. Beeston, "Apologia for 'Sayhadic'",
PSAS, 17, 1987, 13-14.

(3) ヒムヤルに言及している最古の碑文は、書體から見てもそ
らく前一世紀後半から次の世紀の前半あたりの時期のものと思
われる RES 2687 である。この史料によると、當時この
新興勢力はハドラムウト王國の西部國境を脅かしていた。他
方、古典史料としてこの勢力に最初に觸れたのはプリニウス

の『博物誌』で、その第六卷第三二章第一五八節に、メサラ
という町を持つホメリタエ族 (即ちヒムヤル) への言及があ
る。一般にこの箇所は前一世紀の史料に基づいていると推測
されているが、その史料が何であるかは特定されていない。
情報源が確かなのはそのすぐ後の第一六一節の記事で、前二
五／二四年に南アラビアに遠征したアエリウス・ガルスの一
行がもたらした情報に基づき、當時ホメリタエ族が南アラビ
アで最も人口の多い種族であったと記してある。彼らの使用
した暦が前一〇〇年を紀元としているところから見て、この
頃に「ヒムヤル／ホメリタエの名で呼ばれる部族連合の中核
が形成されたのではなからうか。拙稿「古代南アラビアの紀
元について」『オリエント』第三二卷第一號、一九八八年、
六〇～六一頁参照。

(4) Ch. Robin, "Quelques épisodes marquants de l'histoire
soudarabique", AAKM, 63. かじロビン は「マーン王國
の滅亡年代をキリスト紀元の轉換點前後に置いていた (Id,
"La civilisation de l'Arabie méridionale avant l'Islam",
J. Chelhod (ed.), *L'Arabie du Sud, histoire et civilisa-
tion*, Vol. 1, Paris, 1984, 210). それを百年餘り溯らせた理
由は記されていないが、推察するに「サイハド期の編年につ
いて所謂「短期編年説」から「長期編年説」に立場を變え、
サイハド文明の開始期を従來より數百年早く考えるようにな
ったことに伴う措置ではなからうか。

(5) 「古代南アラビア碑文中の「*ḥb*」「*ḥb*」」『オリエント』第
二二卷第二號、一九八〇年、一七～三八頁。

- (6) 古代南アラビア碑文に現れるアラブ・ベドウィンを主題とする先行研究としては上記のものが多く、J. Halévy, "Les Arabes dans les inscriptions sabéennes", *Revue sémitique*, 7, 1899, 146-157; M. Höfner, "Die Beduinen in den vorislamischen arabischen Inschriften", *ASB*, 53-68; Ch. Robin, "La pénétration des Arabes nomades au Yémen", *AAKMM*, 71-88.
- (7) I. Eph'ai, *The Ancient Arabs. Nomads on the Borders of the Fertile Crescent 9th-5th Centuries B. C.*, Jerusalem, 1982, 21.
- (8) *Ibid.*, 6.
- (9) H. Rouillard-Bonraisin, "Présence et représentations des Arabes dans les écrits bibliques", *PACF*, 23-35.
- (10) テクストに王名の記れづる場合は、その王の在位年代。但しヒマヤル紀元による紀年のものを除く (Nos. 51, 54-60) は、それを西暦に換算。王名が記れづる場合とは、碑文の書體からその年代を推定した。
- (11) ロビンによれば、ロビン (Robin, "La pénétration 73 and 77") がこの碑文をその年代に早い時期のものとする根拠を示している。
- (12) ユーストンは初期イスラム時代のノンナー (al-Abnā') との比較に基いて、その 'bnw' を "second-generation immigrants" と解して、A. F. L. Beeston, *Warfare in Ancient South Arabia (2nd-3rd. centuries A. D.)*, London, 1976, 3.
- (13) 筆者撮影の寫眞による。
- (14) テクストに王名は記されていないが、文脈より上記の王の治世に属することが明らかな場合には、括弧して (同上) と記す。以下同様。
- (15) このテクストは「王 (mlkn)」との記や、王號が添えられつつあるが、他の碑文の中には MY という王號を有している。以下同様。
- (16) ベーナー・ヌイス『アラブの歴史』(林貨・田中孝監訳、学生書房、昭和四二年) 一〇—一四。
- (17) Cf. Eph'ai, *op. cit.*, 6-9; A. Caquot, "Postface", *PACF*, 144.
- (18) 舊稿同様。本稿にならぬが、ケニンガーの次の定義に基づいて「ベドウィン」などの語を使用している。—"C'est sur-tout le caractère guerrier, intimement lié à l'élevage du chameau, et une certaine forme d'organisation tribale qui constitue le sujet principal de cette étude." (J. Henninger, "La société bédouine ancienne", *ASB*, 70-71) Cf. W. Dostal, "The Evolution of Bedouin Life", *Ibid.*, 14-15.
- (19) ベドウィン天文図説は前二二〇—一〇六年の間に、この Ar-ba-a (Arabs) と記されている。この言及があり、彼の活動がベドウィン帯で猖獗を極め、ベドウィンの町を略奪し、困窮させた様子が見える。A. J. Sachs and H. Hunger, *Astronomic Diaries and Related Texts from Babylonia*, Vol. 3: *Diaries from 164 B. C. to 61 B. C.*, *Texts*, Wien, 1996, 64-65 と記している。阿拉伯三国は漢文 (B. Ag-

goula, *Inventaire des inscriptions hatréennes*, Paris, 1991, 158-159) 三行目の 'by' を「春田晴郎は一應「アラブ人」と譯したうえで、これには「ジャズイーラ地域の人々」、「ベドウィン遊牧民」、「(ハトラ内の) エスニックな區分でアラビア人すなわち南西セム語を話す人々」の三つの可能性があるが、現状ではこれとも決め難い」と述べている(「マルシヤク朝バルティア時代の都市の多様性」『オリエンタル』第三六卷第一號「一九九三年」二〇〇～二二三頁)。Cf. J. B. Segal, "Arabs at Hatra and the Vicinity: Marginalia on New Aramaic Texts", *JSS*, 31, 1986, 57-80.

- (20) ロビン氏は自身の見解によれば前六世紀の「ヤーン碑文」(MAFRAYash-Shaqab 3) 八行目の 'rb' という語を「アラブ」の意に解し、これがこの語の初出例であると主張している(Robin, "La pénétration", 72-73)。しかし「アラブ」が AAKM の書體の中で正確に指摘してあるもの(W. W. Müller, *BiOr*, 51, 1994, 472) 八～九行目の 'rb/hmst/m'yt/wd' という表現には、他の「ヤーン碑文」に類似の例がいくつもあり、いずれの場合にも 'rb' は「捧げる」という意味の動詞と解されている。この場合も同様に解し、「ワッド神に五つの薫香を奉納した」と譯するのが適當であろう。

- (21) 言語的には「デダーン／リフヤーン語」「サマード語」「サマア語」と、所謂アラビア語を母語としている人々を「アラブ」と呼ぶ。本稿では以後、特に断り書きのない場合、「アラブ」という語は「アラブ」を指している。

- (22) 但し「イブン・ハルドゥーン」は殆どこの區別をせず、'arab

という語で双方の意味を表している。文脈からラクダ遊牧民を指していると判断できる場合、邦譯書では「砂漠のアラブ族」とか「ベドウィン」と譯されている。『歴史序説』第一卷(森本公誠譯・解説、岩波書店、一九七九年)、二六六～二七七頁参照。

- (23) A. F. L. Beeston, M. A. Ghul, W. W. Müller, and J. Ryckmans, *Sabaic Dictionary*, Louvain-la-Neuve/Beyrouth, 1982, 19.

- (24) Robin, "La pénétration", 73-74.

- (25) この場合、關係節が後ろから接する形で接續形をとっている。

- (26) No. 5: 'hdt/w'rb (ムハタヤト人トアラブ人) No. 9: Hmyrm/w'rbn (ヒヤマル人トアラブ人) No. 44: Hmln/w'hwln/w'sqn/w'rbn/w'Kdt (フマラーン族トハウラーン族トナシマ市民トアラブ人トキンダ族) No. 49: bn/Sb/lt/m'm/sdm/w'bn/rbn/lt/m'm/sdm (サハ族かシハ族の兵) アラブ人から三百人の兵 No. 50: 'shn/Sb/w'rbn (サハ族トアラブ人)。

- (27) A. F. L. Beeston, "Notes on Old South Arabian Lexicography VII", *Le Muséon*, 85, 1972, 543. Cf. Id., "Kingship in Ancient South Arabia", *JESHO*, 15, 1972, 258-259.

- (28) 古代南アラビア史の初期の編年を巡る國際學會が、一九九一年五月にローマで開催され、そこで行われた發表がようやく昨年刊行された—Ch. J. Robin (ed.), *Arabia Antiqua*.

- Early Origins of South Arabian States*, Roma, 1996. 長期編年説と短期編年説をそれぞれ代表する二つの説は、その重要性に鑑みられ、先立って別に公刊されたA. Avanzini, "La chronologie longue et le début de l'histoire sud-arabique", *Quaderni di Studi Arabi*, 11, 1993, 7-18; G. Garbini, "La cronologia "lunga": una messa a punto", *Ibid.*, 19-26.
- (29) H. von Wissmann, *Zur Geschichte und Landeskunde von Alt-Südarabien*, Wien, 1964, 79-206.
- (30) M. A. Ghul, "New Qatabāni Inscriptions-II", *BSOAS*, 22, 1959, 433-436.
- (31) Robin, "La pénétration", 77; Id., "Les premiers États du Jawf et la civilisation sudarabique", *Arabia Antiqua*, 56.
- (32) Id., "Les langues de la péninsule Arabique", *AAKM*, 98, Id., "Les premiers États", 55. シタハト一語で用いられる言葉が、ティーンの本来的言語では「ムサヤーン語」稱するものはあり得ないという理由で、ロビンがこれをこの地方のワバヤの名に因んで「マザーン語 (madānien)」と呼ぶことを提唱している。
- (33) ティーン商人の居留地が設けられていたアラビア半島中部のカルヤと北ヒジャーズのウラー (かつてのデダン) には、彼らの多数の碑文が残されている。半島外では、エジプトのファイユームと地中海のデロス島から発見された碑文が、ティーン商人の活動範囲の廣さを證する史料として名高い。
- (34) A. Sprenger, *Die alte Geographie Arabiens als Grund-lage der Entwicklungsgeschichte des Semitismus*, Amsterdam, 1966 (1st ed. Bern, 1875), 63-64.
- (35) A. R. al-Ansary, *Qaryat al-Fau. A Portrait of Pre-Islamic Civilisation in Saudi Arabia*, London, 1982.
- (36) 拙稿「前イスラーム期の南アラビアの研究状況 (2)」『東京工業大学人文論叢』第一五號、一九八九年 (一九九〇年三月刊)、一六四頁註(4)参照。
- (37) このストーン Tūmal やハズマンゼ、トリヤハス『博物誌』第六卷第二八章第一五四節の Thomale/Tomal、トマントハス『地理學』第六卷第七章第三三三節の Thoumata に比定し、特に後者の記事をめぐって現在のウーナン・ビシャのトマンスに當っていると Wissmann, *op. cit.*, 64 (Abb. 1), 184-185.
- (38) A. R. al-Ansary, *op. cit.*, 19, 144 (fig. 2); Id., "Adwā' gādida 'alā dawla Kinda min hīlal aṭar Qaryat al-Faw wa-nuḡṣūḥā", *Studies in the History of Arabia*, Vol. I, Part 1, Riyadh, 1399H/1979 [Publ. 1981], fig. 1-b and pl. 2 (Arabic section).
- (39) ハズマンはこれを「トマントハス『地理學』第六卷第七章第三三三節の Katanai に比定し、al-'Arid の西、即ち地圖1の「トマントハス」ハリバーンあたりに置いている。Wissmann, *op. cit.*, 64 (Abb. 1), 182. 言ひまじいながら、この族名は、後に形成されるアラブの系譜圖の中で南アラブの祖として位置付けられる。
- (40) 人質としてサバに引渡された HSSITN の王トマハ・

ル・カイヌについては、拙稿「前イスラム期の南アラビアに
關する三つの英雄傳説——ソロモン、アレクサン드로ス、カ
イ・カーウース」、『日本中東學會年報』第五號、一九九〇
年、三五—三八頁參照。このイムル・ル・カイヌの父の名
はアウフ 'awm' で、ナマール碑文の同名の王 (アムルの息
子) とは別人である。なお、右の論文の三五頁、下から四行
目「ハササマ」に附するべき注番號(45)が落すところ。

- (41) M. A. Bataqih, *L'unification du Yémen antique. La
lutte entre Saba', Himyar et le Hadrâmanut du I^{er} au
III^{ème} siècle de l'ère chrétienne*, Paris, 1990, 233-296.

- (42) Cf. *Ibid.*, 300-302.

- (43) 「アドナーリス紀功碑文の新解釋」『東西海上交流史研
究』第三號、一九九四年、九三—一〇三頁。

- (44) W. W. Müller, "Eine sabäische Gesandtschaft in Kre-
siphon und Seilenkeia", R. Degen, W. W. Müller, and W.
Röllig, *Neue Ephemeris für Semitische Epigraphik*,
Vol. 2, Wiesbaden, 1974, 161-162.

- (45) イスラ族にはサレー・アサド (Asd al-Sarā) とサレー
ンのイムン (Asd 'Umān) の二種がある。イムンとサレー
は言及しつゝあつたのは前者であるが、"サレー・イムン" の
碑文のイムンは後者である。 *Ibid.*, 159.

- (46) W. Caskeel, "Die Inschrift von en-Nemāra—Neu Gese-
hen", *Mélanges de l'Université de Saint-Joseph*, 45,
1969, 367-379; A. F. L. Beeston, "Nemara and Faw",
BSOAS, 42, 1979, 1-6; I. Shahid, "Philological Observa-

tions on the Namāra Inscription", *JSS*, 24, 1979, 33-42;
H. I. MacAdam, "The Nemara Inscription: Some Histori-
cal Considerations", *Al-Abhāt*, 28, 1980, 3-16; I. Shahid,
Byzantium and the Arabs in the Fourth Century,
Washington, D. C., 1984, 31-53; J. A. Bellamy, "A New
Reading of the Namārah Inscription", *JAOS*, 105, 1985,
31-51; M. Kropp, "Vassal—neither of Rome nor of Persia-
Maral-Qays the great king of the Arabs", *PSAS*, 23,
1993, 63-93.

- (47) シタマンナー (Sprenger, *op. cit.*, 208) はタートン・タ
ン・アト・ネス『地理學』第六卷第七章第三節と Kananiat
(註(55)參照) のすべ次に置かれてゐる。Thanoutai/Tha-
nouetiai とは定じ、ヤト・ネン (Wissmann, *op. cit.*, 192)
とつて同意してゐる。アミンの歴史書 (大註參照) が記し
つゝるアミンと比べるゝとかなり内陸で、アミンがペルシヤ
方面に移動する前の彼らの居住地である。

- (48) *The History of al-Jabart*, Vol. 4, translated and an-
notated by M. Perlmann, Albany, 1987, 128-150 (Leiden
ed.: 745-771); G. W. Bowersock, *Roman Arabia*, Cam-
bridge, Mass., 1983, 132-142.

- (49) MacAdam, *op. cit.*, 5-8; Shahid, *Byzantium and the
Arabs*, 45-53; Kropp, *op. cit.*, 75-77.

- (50) この碑文は現れる諸族の同定は、碑文の刊行者 (表の出典
參照) に多少の詳しさを付してゐる。

- (51) シタマンナー (*op. cit.*, 139) は「アト・ネン・アト・ネス『地

理學』第六卷第七章第一九節の Aboukaioi をフント・ル・カイスに比定するのが通説であるが、前者が置かれてゐるのはヘルシマ灣の灣頭近くである。果たして彼らはそれほど早くからここまで進出してゐたのであろうか。

- (52) この傳承については、ピオトロフスキーの詳しい研究がある。M. B. Piotrovskij, *Predanie o chimjarijskom care*。Ašade al-Kamile, Moskva, 1977.

- (53) キンダを添へトランの傳承については下記の書を参照。G. Olinde, *The Kings of Kinda of the Family of Akl al-Murār*, Lund, 1927.

- (54) I. Gajda, "Huḡr b. 'Amr roi de Kinda et l'établissement de la domination himyarite en Arabie centrale", *PSAS*, 26, 1996, 65-73 and pl. I.

- (55) この問題に關しては上記の拙稿を参照されたい。「ナジヤランの迫害の年代について——古典シリヤ語三史料の傳える年代」、『東洋學報』第六七卷第一・二號、一九八五年、八一—一〇九頁。「ナジヤランの迫害の年代について——『アレタス殉教録』の傳える年代」、『史學雜誌』第九五編第四號、一九八六年、一—三三頁。「再びナジヤランの迫害の年代について——關係史料の再検討」、『東洋學報』第六八卷第三・四號、一九八七年、九九—一二七頁。

- (56) Ch. Robin, "Le problème de Hamdan: des gays aux trois tribus", *PSAS*, 8, 1978, 46-52.

- (57) Cf. H. Djali, "Les Yamanites à Kufa au I^{er} siècle de

l'Hégire", *JESHO*, 19, 1976, 157-158.

- (58) ラント朝については取り敢えず上記の書を参照。G. Rothstein, *Die Dynastie der Lahmiden in al-Hira*, Hildesheim, 1968 (1st ed. Berlin, 1959). 但し本書は、註(55)に挙げたオリンダーの書、次註のネルデケの書とともに、刊行されてから既に長年月がたつており、内容の見直しが必要である。

- (59) ギャカーン朝については上記の書を参照。Th. Nöldeke, *Die Chassanischen Fürsten aus dem Hause Gafna's* (= Abhandlungen der Königl. Akademie der Wissenschaften zu Berlin, Philos.-histor. Klasse, Abh. 1887, II), Berlin, 1888; W. Smeaton, *The Beginnings of Ghassān*, Chicago, 1943.

- (60) フロロビウス『諸戰争史』第一卷第一九章第一〇節に、ハステニアヌス帝よりハルメスティアナのサラセン人の長 phylarchos に任命された」という記事のあるアボカラボン Abocarabos に比定される。

- (61) Cf. Robin, "La civilisation", 212.

- (62) 拙稿「エリヤトラー海案内記の世界」佐藤次高・岸本美緒編『市場の世界史』(地域の世界史・第一〇巻、山川出版社、一九八八年刊行豫定)第一節参照。

- (63) *The Camel and the Wheel*, Cambridge, Mass., 1975, 87-110.